

女おんな

殺ころし

油あぶらの

地ぢ

獄ごく

解題

享保六年七月十五日から、初めて大阪の竹本座に上演された。作者は近松門左衛門（時に六）である。

本曲は世話物の傑作であつて、三巻に分れてゐる。

本曲は、家庭教育の缺陷によつて、愛子が無頼漢となる徑路を説き明かしたものである。其の中に巢林子の愛の眼に映る鋭い人生觀が織込まれ、親も子も深く反省せねばならぬ幾多の教誡暗示が含まれてゐる。實に彼の世話物中で別趣の構想になる傑作であるが、其の眞價を認められたのは近來の事である。

實説

實説は詳でない。本曲に據ると、驕兒河内屋與兵衛は幼にして父を失ひ、繼父は、與兵衛が主人の遺兒であるので、嚴しい躰を憚つた。又實母は子の愛に溺れた爲に、與兵衛は歳を追うて無頼の者となつた。彼は家業を勵まず、我が家にゐるを淋しがつて外を出歩き、遊蕩に日を暮し、悪友と交はつて狂暴性を助長した。其の果は金に窮し、享保六年五月四日の夜お吉殺し・強盜の大罪を犯して、千日刑場の露と消えた。

本曲はこの悲惨事を、巢林子の靈腕によつて藝術化したものである。

影響

歌舞伎では、本曲の作られる以前に、お吉殺しを大阪の中座で演じた事は本曲下之巻に見えてゐる。其の後淨瑠璃でも歌舞伎でも、近年まで再演された事を聞かぬ。蓋し世智辛い世態を寫して、慘たらしい悲劇に終り、華やかな場面に乏しいので、俗受のしなかつた爲であらう。

明治の世になつて復活し、同四十年には三崎座の女芝居に上演された。また霞亭の補作した物は明治四十三年一月に南座、同年五月に新富座で上演され、痴雪の改作した物は大正十五年三月に中座で上演された。其の後も往々所々で上演されてゐる。

上 卷 (水茶屋及び
其の附近)

登場人物の主な者

- お 龜(北の新地料理茶屋の女主人)
- お 蠟(會津者。遊客)
- 小 菊(北の新地天王寺屋の遊女)
- お 吉(油商豊島屋七左衛門の妻。二十七歳)
- お 清(お吉の次女。六歳)
- お 傳(お吉の第三女。二歳)
- 河内屋與兵衛(本天満町油商河内屋の二番息子。二十三歳)
- 刷毛の彌五郎(與兵衛の遊び友達)
- 皆朱の善兵衛(與兵衛の遊び友達)
- 小 栗 八 彌(高槻藩士。小姓立の出頭)
- 山本森右衛門(高槻藩士。與兵衛の伯父)
- 豊島屋七左衛門(本天満町の油商)
- お吉の長女(九歳)

梗概

享保六年四月、野崎觀音の開帳供養が行はれ、大阪の善男善女が參詣の爲に、或は川舟に乗つて寢屋川を溯り、或は陸路を行き、雑沓を極める。

其の十一日、北の新地料理茶屋の女主人お龜は、會津の客蠟九・遊女小菊などと共に、遊山がてら野崎觀音へと志して、鯉江川から屋形舟に乗り、徳庵堤を過ぎて舟を捨て陸路を辿る。其の道すがら唄を歌ひ、岡山の壽命の松を見、四方の景色に興じつつ行く。又豊島屋七左衛門の妻お吉は次女三女を連れ、之も參詣を志して堤傳ひに一ツ橋あたりに來り、路傍の水茶屋に憩ふ。

折節近隣の河内屋の放蕩息子與兵衛は、己が馴染の遊女小菊が會津の客と連立つて來るのもこの道筋と察し、嫉妬の焰を燃しながら、悪友刷毛の彌五郎・皆朱の善兵衛と戯れつつ來る。お吉は茶屋の腰掛に休みながら之を見、「申し與兵衛様、爰へ」と招いた。與兵衛「ヤアお吉様か、子供衆連れてのお参りか。知つてゐたら一處に参りませうものを。して七左衛門様はお留守番

なさるか。お吉「いや連立つて出ましたが、主人は二三軒寄る所もあつて遅れました。さあお連れ衆もこれへお掛けなさい。」彌五郎「さらば煙草一服致さうか」とて腰掛ける。お吉「何と與兵衛様大變なお参りではないかいの。アレあそこへ桔梗染の腰變り、縮緬子の帯をしたのは女郎さんぢやな。ソレそこへ縮緬の鹿子帯なは新町の遊女でなござんせう。若い衆がああ様の美しいのを連れたがるのも無理はござんせぬ」と語れば、與兵衛ふはと乗り、「されば私も天王寺屋の小菊を誘ひましたが、彼めは野崎へは方角が悪いから行かぬと斷つた。それに聞いて下され、會津客に連れられて参りをつた。田舎客に負けては男がすたる。小菊の歸りを待受けて思ひ知らせてやる」と言へば、友達も與兵衛の加勢と手ぐすね引く。お吉「これはさて、さやうな心で觀音参りなさるか、そりや喧嘩師ののら参りよ。其方の不身持は親御がよう知つて苦に病んでござる。どうぞ心を入替へ眞人間となつて、親達を安心させますやうに心願立てさんせ」と、懇ろに諭した後、茶屋に禮を述べ、子を連れて去る。善兵衛「あの女は與兵衛が筋向ひのお噂様ぢやないか。色盛りの美しい顔で堅氣な女ぢやな。與兵衛「ム、年もまた二十七、可愛い女ぢやが、子澤山に生みひろけ、所帯染みて甘味がない」と打笑ふ。

彼方から蠟九の一行が浮かれて来る。與兵衛等三人「そりや來るぞ」と待ち構へ、小菊と掛合つて蠟九と喧嘩となる。腕力のある蠟九は彌五郎・善兵衛を蹴飛ばし、與兵衛と渡り合ひ、人だかりの中に叩くやら撲つやら、果ては掴み合つて共に川の中に轉け落ちる。

この時高槻藩士小栗八彌が騎馬し、山本森右衛門等を供に連れ、行列を作つて通りかかる。其の際與兵衛が蠟九に投げた川底の泥土は、折悪う外れて八彌に當り、ハツと驚く。其の間に蠟九等は參詣人の群集の中に紛れ込んで逃げ去る。山本森右衛門等は「それ遁すな」と聲を掛け、慮外者を捕へて見れば我が甥であるので、ア、アツと思へど赦す事もならず斬らうとする。之を察した八彌は森右衛門を制止した。森右衛門乃ち與兵衛を突放し、「御意によつて助けるが、下向の時に見つかり次第斬棄てる」と、言ひ放つて過ぎ行く。

與兵衛は恐怖の餘り度を失ひ、うろつき廻つて、お吉が夫を尋ねて後戻りするに逢ひ、「お吉様、私や大變な事をしでかした。お侍の下向に見附ければ斬られる。どうぞ助けて下され」と、泣きながら伏し拜む。お吉は子細を聞いて呆れ果てたが、隣家の好みに無愛想にもあしらはれず、深く今後を訓戒して、茶屋に斷り與兵衛の衣を洗つてやる。其の間にお清は、七左衛門が長女と共に來るを見て走り寄り、「ヤア父様、今お母様と與兵衛様とが帯を解いて拭いてござる」と告げた。七左衛門は之を聞いて茲通と思ひ、怒つて兩人を呼附けたが、其の有様を見て幾分か疑ひ晴れ、「これお吉、人の世話もよい加減にしろ。其の態は尾籠千萬疑はしい」と、小言を言ひながらお吉や子供を連れて道を急ぐ。

與兵衛は一人残され、怖氣の爲に方角を失ひ、水茶屋の前の群集の中を行きつ戻りつしてゐる。折から下向を急ぐ八彌の一行に再び出逢ふ。森右衛門は、與兵衛めがまだ此處にゐるかと心に悲しみつつ、之を捉へて斬棄てようとしたが、又も八彌の情ある言葉によつて放免した。

評

初に野崎觀音を述べる所は、經典の文句を交へて莊重にした。そして川舟に乗り或は徒歩により、參詣する群集の實況を寫して、本曲を構成する主役與兵衛と、お吉との性行を細かく描いてある。

家庭で我儘に育つた與兵衛は、悪友と交はつて全くの驕兒となり、お吉に懇ろに諭されても馬耳東風と聞き流し、蠟九に撲たれても己が非を悟らぬ。されども侍に叩きのめされ、斬られようとすると及んで怖氣立ち、お吉に泣き附いて助けを乞うた。それ程の臆病者であるが、それでも猶改悛する事の出来ぬ薄志弱行の徒である。

お吉は容姿も美しく、心も堅固で、中流商家の主婦として立派な女である。

この兩人の個性が情味豊かな、そして流麗な詞章で書分けられてゐる。巢林子の靈腕は人の心を穿つて、一段の鋭さを加へた。

○船は新造の：乗つて来た「君はしんぞ
船」の唄に據つたもので、この唄は「松の落葉」巻四
に出てゐる。

○しつとん：しとんとん「しとんとん船」
の唄に據つたもので、この唄は「松の落葉」巻四に出
てゐる。

○しつとんと「しとんとん」を受けて同じやう
な音を重ね、「しつほり」の意にうたうた。

○逢ふ瀬 逢ふ時。「傍別菜」に「あふせ」合韻也、
戀によめるは川瀬によせる也。

○波枕 船中の旅泊。しつほり逢ふ時を得て枕
する意にいひやく。波枕は瀬の縁語。

○君が杯：戯れ遊ぶ。「照る月」の唄に據つ
たもので、この唄は「若みどり」巻四に出てゐる。

○武藏野 大杉の名。武藏野の月にいひやく。

○北の新天地 曾根崎新地。

○主なけれど咲く花「後家花を咲かす」の語
による。

○詩込んで 引受けて。

○替名 遊廓では客の本名を人に知られるを懼り、
其の客に縁ある語に替へて呼ぶ。

○蠟九 會津藩へ會津の名産の縁によつた替名。
「名代流さぬ」蠟の縁語で、世に知られた名を流し
失はぬ程の金遣ひの意。

○上り詰めたよ天王寺屋 蓋しく熱中して
有頂天となるを、天王寺屋にいひやく。
○鯨川 大阪島島と相生町との間にある鯨江川。

女殺油地獄

上 卷

船は新造の乗り心サヨイヨエ、君と、我と、我と君とは、圖に乗つた乗つて來
た、しつとんとんしとんとんしつと、逢ふ瀬の波枕、杯は何處行た、

君が杯いつも飲みたや武藏野の、月の、月の夜すがら戯れ遊ぶ、囃したる大
騒ぎ、北の新天地の、料理茶屋、主なけれど咲く花屋、後家のお龜が請込んで、客
の替名は蠟九として生れば陸奥會津にて名代流さぬ金遣ひ、此比難波此里へ上り詰
めたよ天王寺屋、小菊を思ひ、思はれたさに、鯨川よりゆらくと、野崎参りの
屋形船、卯月中ばの初暑さ末の、間に追練りてまだ肌寒き川風を、酒に凌ぎてそ
ろり行、昔在靈山名法華、今在西方名阿彌陀、娑婆示現觀世音、三世の利益、三
年續き、去々年戌亥の春は、裏屋背戸屋に罪深く、針櫛箱や、珠數袋、底に日の
目も見ず知らぬ、一文不通の衆生迄、千手の御手の、摺み取り、紫磨黄金の御肌

歌ふね しんぞ
の
きみ
われ
われ
きみ
は
圖
に
乗
つ
た
乗
つ
て
來
た
、
し
つ
と
ん
し
と
ん
し
つ
と
、
逢
ふ
瀬
の
波
枕
、
杯
は
何
處
行
た
、
君
が
杯
い
つ
も
飲
み
た
や
武
藏
野
の
、
月
の
、
月
の
夜
す
が
ら
戯
れ
遊
ぶ
、
囃
し
た
る
大
騒
ぎ
、
北
の
新
天
地
の
、
料
理
茶
屋
、
主
な
け
れ
ど
咲
く
花
屋
、
後
家
の
お
龜
が
請
込
ん
で
、
客
の
替
名
は
蠟
九
と
し
て
生
れ
ば
陸
奥
會
津
に
て
名
代
流
さ
ぬ
金
遣
ひ
、
此
比
難
波
此
里
へ
上
り
詰
め
た
よ
天
王
寺
屋
、
小
菊
を
思
ひ
、
思
は
れ
た
さ
に
、
鯨
川
よ
り
ゆ
ら
く
と
、
野
崎
参
り
の
屋
形
船
、
卯
月
中
ば
の
初
暑
さ
末
の
、
間
に
追
練
り
て
ま
だ
肌
寒
き
川
風
を
、
酒
に
凌
ぎ
て
そ
ろ
り
行
、
昔
在
靈
山
名
法
華
、
今
在
西
方
名
阿
彌
陀
、
娑
婆
示
現
觀
世
音
、
三
世
の
利
益
、
三
年
續
き
、
去
々
年
戌
亥
の
春
は
、
裏
屋
背
戸
屋
に
罪
深
く
、
針
櫛
箱
や
、
珠
數
袋
、
底
に
日
の
目
も
見
ず
知
ら
ぬ
、
一
文
不
通
の
衆
生
迄
、
千
手
の
御
手
の
、
摺
み
取
り
、
紫
磨
黄
金
の
御
肌

○野崎参り 野崎にある福聚閣慧眼寺に参詣す
るなり。

○卯月なかば 陰曆四月十一日であることが後
文で知れる。

○末の間に追繰る 「女殺油地獄」の初上流さ
れた享保六年は、七月に間があるによつて「末の間」
といひ、間が後にある爲に、時候も順を追うて繰下
るを「追繰る」といふ。これが爲に、卯月中旬の初夏
の頃も、まだ川風肌寒く感じるとの意。

○そそり行く うかれさわぎ行く。ぞめき行く。

○昔在靈山：三世の利益 昔時釋尊は天竺
の靈鷲山で法華經を説示され、今は西方淨土にあつ
て阿彌陀を申し、吾人の住する現世界では觀音菩薩
となつて種々に應現し、過去・現在・未來の三世にわ
たつて衆生に利益を施し給ふ。この釋尊・阿彌陀・觀
音はもと同一體であるとの意。

○利益 神佛が衆生に功德を授け給ふこと。
○三年續き 享保四年那智觀世音の法會、享保
五年法隆寺で聖德太子千百年忌法會、享保六年野崎
觀音の開帳、三年間大法會が續いた。「三世：三
年」は頭韻法。

○去々年戊亥 「女殺油地獄」の竹本座に初上流
は享保六年七月であるから、去々年は享保四年即ち
己亥の年であらねばならぬ。

○背戸屋 裏屋をいふ。
○罪深く 生活に違はれて佛道を信仰しないで、
罪障深きをいふ。

○一文不通 無智文盲の衆生と、針種箱や珠數

女殺油地獄

に忽ち那智の觀世音、去年は和州法隆寺、聖德太子の千百年忌、これ又救世の大
悲の化身、續いて今年此薩埵、櫻過にし山里の、誰訪ふべくもなかりしに老若男
女の、花咲きて、足をそら／＼空吹風に、散らぬ色香の伊達参り、大人童も歌ふ
を聞けば、行もちんつ、歸るもちんつ、又來る人もちんつちりつて、チリテツテ、
傳手を頼みの乗合船は、借切／＼よりも徳庵堤、鱸に舳を漕ぎ附て餘所も一つの舟
の内、客は是を見よ顔自慢、や、共すれば痴話事の、それに委せた身の上も、人も

袋の底にあつて日の目も拜まぬ一文錢とにいひかく。
○千手の御手 衆生の數多の手々に錢を喜捨する意に、千
手觀音の御手が寶錢の掴み取りをいひかけた。但し那智山の本
尊は如意輪觀音である。

○掴み取り 勢せすして大儲けする意に、近松作心中
宵庚申上巻に「大坂で見物物に致したら、錢金の掴み取り」。

○紫磨黄金 紫色を帯びた黄金をいひ、之をまた紫磨金或
は閻浮檀金ともいふ。黄金佛。

○那智の觀世音 紀州熊野那智山上にある青岸渡寺をい
ひ、西國巡禮第一番の札所として名高い。本尊は如意輪觀音であ
る。近松は之を千手觀音と誤信し、「領域反魂香」三熊野かゆる
ふ姿の中にも、「那智は千手觀世音」とある。

○去年は和州法隆寺 享保五年二月十五日から法隆寺で
聖德太子千百年忌開帳。

○タタキ 扇を敲いて拍子を取りながら、流行唄を歌ひ、門
附して歩いた者をいひ、その拍子で歌ふこと。

○救世 觀世音をいふ。聖德太子は大慈大悲の觀世音の化身
であつて、そのことは「今昔物語」卷十一（本朝部の最初に見え
てゐる。故に「救世の大悲の化身」というた。

○この薩埵 野崎觀世音菩薩をさす。薩埵は善跡に同じ。こ
この文は、薩埵に開帳の沙汰をいひかく。「攝陽奇觀」卷之二十
五、享保六年の條に「三月より野崎觀音開帳」とある。

○花咲きて 美しく著飾りて行くから斯くいふ。花は標に
對する縁語。

○足を空 心浮き立つて落着かぬさま。この文は「足を空」
を「そらく」と重ねて、同じ語「空吹く」にいひつづけた。

○行くもちんつ：チリテツテ 「山崎通し」の唄を尋
かれて口三味線にかへた。

○つてを頼み 知人に頼んで獲せてもらふ。「つて」は、て
づるの意。

○徳庵堤 寝屋川の北、徳庵の堤。乗合船は借切るよりも得
をいひかく。

○ひらり帽子 (見索引)。ひらりミ一飛にいひかく。

○町で名古屋 遊女であるから、ぢみな町女風で無いを「名古屋」にいひかく。

○名古屋の胸高帯 貞字、亭保頃は鶴真出(まなむね)の平帯が流行した。もと肥前名護屋で麻絲で組んだ帯であるによつてこの稱がある。當時女は帯を胸まで高く上げて纏ふのを意氣な風にして流行した。詳しくは「近松語彙」を見よ。

○小笹に：品にこそ由れ 儉約物惜しみも人・品にこそ由れ、遊女小菊の美しい姿に見惚れては、小笹の露の散る如く粒銀をこぼし散じたくなるこの意。

○鈴 粒銀のこににいふ。そして露をいひかく。
○世智辯 吝嗇の意。
○冷泉 深淵の一種である冷泉館をいふ。

○道草 道中を暇を費すこと。もと牛馬が道草を食うて暇を費す義より出づ。
○これの見さんせナ：三筋立つ 小室節の元唄「小室出て見りや淺間の山に、けさも煙が三筋立つ」の特異。愛宕山の頂上には愛宕神社がある。

○沈 沈香。
○玉銚の 玉銚の身より道にかかる枕詞。こゝは道の意にいふ。

○巽 東南。
○良 東北。
○坤 西南。

恥かし氣詰りと、小菊は陸へ一飛に、ひらり帽子の深々と、眉は隠せど風采の、
町で名古屋の胸高帯は小笹に、露の城られぬ始末算用世智辯も、人にこそ由れ品
にこそ纏れつ、縫れつ、道草に、人の言草ア、むつかしく、煩さく憎く厭らしく、
我供舟を小手招き、これの見さんせ、愛宕の山にヨシ、沈の煙が、三筋立つ煙がナ
沈の、沈の煙が、三筋立つ、四筋に分れ、玉銚の、是より巽奈良街道、良角
は八幡道、玉造へは、坤、西は元來し京橋や野田の片町、大和川、爰は名に負
ふ壽命の松、御代長久の岡山を、歌には忍の岡とも詠み、讚良山口一橋渡し
て救ふ御願力、無量無邊の聚福閑慈眼視衆生念彼觀音、身得度者の御誓、問ふも
語るも行く舟も陸路歩ふも諸共に迷ひを聞く腰扇御堂に、念珠を繰返す所を問へ
ば、本天満町の幅さへ細々の、柳腰や柳髪とろり渡世も種油、梅花、紙漉、荏
の油夫は、豊島屋七左衛門妻の野崎の開張參り、姉は九ッ三人娘抱く手、引手に、
見返る人も、子持とは見ぬ花盛り、吉野の吉の字を取つてお吉とは誰が名附けん、
お清は六ッ中娘、「母様ふ、が飲みたい」も折節傍の出茶屋店、「爰借ります」と休
らひぬ、是も同町筋向ひ、河内屋與兵衛まだ二十三親が、り、同商賣の色友達刷

○京橋 大阪市東區京橋。

○野田の片町 大阪市北區の内。

○大和川 鯉江川の南にあつて、京橋の所で大川に入る。

○壽命の松 河内國北河内郡四條畷村大字岡山に生茂してゐる老松の名。長久の松ともいふ。

○忍の岡 岡山をいふ。古歌に岡山を忍の岡と詠んである。

○讚良山口 讚良は今北河内郡の内に入る。讚良山の名。

○一ツ橋 岡山の南、讚良山の口にあつた。参詣者に乗せて大阪通ひ船の發着場で、掛茶屋などがあつた。

○聚福閣 身得度者 福聚閣意取寺野崎觀音のこゝをいひかけて、「普門品」の文句につづけた。

○だらう だらうを「だらう」と延べたのである。

○御誓 觀音が身を三十三身に現じて、六道の衆生を救済しようとの御誓願。

○迷 煩惱の迷ひ。

○御堂 野崎觀音の御堂。

○本天満町 大阪市東區伏見町三十三丁目邊。「難波丸綱目」二之巻に「本天満町」碑筋よりせんたんの木筋迄。

○柳腰や柳髪 柳腰は美人の細腰をいふ。柳髪も長く美しい髪をいふ。

○とろり渡世も種油 「とろり」は油とお吉の

毛の彌五郎・皆朱の善兵衛、野崎参りの三人連れ萬事を夢と飲み上げし、寐覺提

重・五升樽坊主持して北うづむ、小菊めが客と連れ立よしと下向するも此筋

と、のさばり返つて來る道の、茶店の内より「申々與兵衛様、爰へ」と呼か

けられ、「ヤお吉様子供衆連れての参りか、存たら連れに成ませよ物、七左衛門

殿は留守なさるゝか、「いや此方の人も同道二三軒寄る所もあり、追附爰へ見へ

る筈、お連れ衆もマア是へ、平に」と強いられて「煙草一服致さうか」と、

美觀の形容。「渡世は草の種」の語によつて、「渡世も種油」とつづけた。

○梅花 美粧料の香油の名、梅花油。

○紙漉 紙で漉した精製油。

○花の油 荏の實から取つた油。

○引く手 片手に娘お満の手を引いてゐるのである。

○ぶぶ 湯又は茶をいふ小兒語。湯又は茶は熱いから、ぶぶと吹き冷すによつて「ぶぶ」といひ、「ぶぶ」の頭の一音を離らせて「ぶぶ」といふ。

○色友達 遊里通ひの友達。

○刷毛 刷毛齧によつた諺名であらう。

○皆朱 赤顔によつた諺名であらう。そして皆朱の勝を善兵衛にいひかけた。

○萬事を夢と 人世萬事夢の如しと心得て著實の心なく。

管公の詩句に「萬事皆別夢、時々伊較否」。

○寐覺提重 食器・食物・徳利等を替れ、提けられるやうに作つた重箱を提重といひ、提取の手續なるを寐覺提重といふ。

○坊主持 「徳言集覽」に「坊主持」途甲にて道連れの持物などを順持に、坊主に行あひたることに代るを云ふ。

○北うづむ 「北埋む」であつて、坊主持として自分の番になれば逃げて、北に行く野崎参りの人込みの中に身を隠し埋める意であらう。(或は「北」に「ゆ」をよみ、野崎参りの群衆の中に逃込んで、身を隠し埋める意か。

○よし うれしく、ゆれ動くさま、よまき。

○下向 神佛に詣でて歸ること。

○のさばり返る 伸張り反るの義。意氣揚々たるをいふ。

○平に 平に「へら」これへ腰を掛けなさい。

◎のんこらし のんこ監(雨傘を細く狭く残し、
監を高くする結髪で、伊達を好む若者の間に流行し
た)の伊達自慢らしい。

◎お家様 町家の主婦の敬称。おへ(おうへの
約)様ともいふ(おかみ様とは老女をさしいうた)。

◎桔梗染 桔梗の花の如き(薄紫に稍上藍を帯
ぶ)色染。

◎腰變り 腰にあたる所だけ、染色・縹文を變へ
た衣服。即ち女の小袖の腰あき、鬘斗目、肩懸など
をいふ。

◎縞縹 縹縹子の略。縹のある縹子。

◎しや 者。「それしや」に同じ。遊女をいふ。

◎中の風 大阪新町の遊女風。

◎贅 贅澤。全盛。階上。

◎新地 大阪北の新地即ち曾根崎新地。

◎知つて居るか 知つてゐるたらうがなあ。

◎ばつと 漫然。

◎残多い 心残り多い。残念な。遊女を連れる
ことが出来なかつたのが残念なといふのである。

◎貰ひ 客に買はれ又は光約ある遊女が、都合に
よつて暇を取る意の罵詞。

◎貸し 身を貸す義で、約束によつて客に買はれ
てゐる遊女が、一時的に他客の相手となる意の罵詞。

◎川御座 川を航行する屋形舟。

◎一出入 一論評。一喧嘩。

◎問ふには落ちず語るに落ちる 人に問
はれる時は用心して秘密を漏さねども、手氣で語る

腰打掛くるものんこらし、何んと與兵衛様、御繁昌な参りでは無いかいの、よい衆

の娘子達やお家様方、アレ〜あそこへ桔梗染の腰變り、縹縹の帯しやはひ

の〜、ソレ〜そこへ縹縹に鹿の子の帯、縹に中の風と見た又一位見事で

は有ぞ、如何様若いお衆が此様な折に、あんな見事な者引連れ、贅の遣りたいは

道理、こな様も連れ立度い者がある、こんな折に新地の天王寺屋小菊殿か、新町

の備前屋松風殿か、何と能ふ知つて居るか、なせ連れ立て参らんせぬ」と、ばつ

と乗すればふはと乗り、残多、天晴れ今日は物の見事な事で、参りの群集に目を

覺させうと、此中から腕いたれど備前屋の松風めは先約が有て、貰ひも貸しもな

らぬと吐かず、天王寺屋の小菊めは野崎へは方が悪い、何方の御意でも参らぬと

言ひ切、それに聞て下され、小菊めが今日會津の客に揚げられ、早天から川御座

で参り居つた、田舎者に仕負けては此與兵衛が立たぬ、小菊めが歸るを待て一出

入」と、咄の内から二人の連れ、腕押揉んで力みかけ、鬼共組べき勢なり、そ

れ〜問ふには落す語るに落ちると、利口そうにそれが信心の観音参りか、喧嘩師

ののら参り、買はしやんすお山も傾城も、何屋の誰何屋の誰と、親御達が能ふ知

○數の子 かか(鱧)の子の義。鱧のはらごを
乾したもの。

○じうて 「染じ」みての音便。

○こうたう 着賣(紙出)

○船細工の鳥 守貞漫稿卷五、船細工の條に
「昔は鳥形を導らざるが、今世も船の鳥と云ふて
船細工の態名とす」。

○しろうと 白人即ち遊女をいふ。○はくじを
を見よ。ここの文は白人小菊と初心の田舎客蠟九を
をいひかけた。

○主の後家 北の新地料理茶屋の女主人お龜。

○替りちんつ 前文にある「行くもちんつ云々」
の口拍子三味線節の替歌。

○國訛 會津國訛。

○尙 芝居で若治郎又は美男子に扮する者。

○甚左衛門 大和山甚左衛門をいひ、當時有名
な俳優。

○幸左衛門 竹島幸左衛門をいひ、當時有名な
俳優。

○四郎三 櫻山四郎三郎をいひ、當時有名な俳
優。

○やつちや 寝める時の掛聲。

○手ぐすね引く 手に薪焼くすねを引く義。
力を入れようとする時手に唾して物を取るの類。即
ち、手に唾して敵の來るを待受ける意。

○花車 遊女屋の主婦。蓋し遊女を花に喩へて花
か廻すといふ意であらう。

堅い女房じやな、されば年もまだ二十七、色はあれど數の子程産み廣げ、所帯
じうて氣がこうとう好い女房にいかひ疵、見かけばかりで美味のない、船細工の
鳥じや」と笑ひける、かくとはいかで白人の、田舎の客に揚げられて、連れて主
の後家まじり替りちんつの國訛、尙は甚左衛門・幸左衛門が思案事四郎三が憂い
事、ちんつ、く、ちんちりつてつて、「日本一の名人様やつちや」と褒め
る歌より褒めさする、金ぞ諸藝の上手なる、そりやく、来たぞ」と三人が手ぐす
ね引たる顔色、小菊遠目にはつと驚き、申花車さん、同じ道ばかり氣が盡きる、
初の舟に乗たい」と裾搔取て立休らふ、先に與兵衛帆布立跡に二玉の張番立、與
兵衛急くな女郎と詰開いて男立てい、會津蠟燭が光立てしたら、此方二人が心切
て踏消してくれる」と、草履を腰に腕巻り、客は顛倒花車も下女も狼狽へ、小菊
を圍ふてうぞ顛ふ、小菊殿借つた、馴染の河與が借るからは動かせぬ」と、茶屋
の床几に引摺り据ゑ、是賣女様安お山様、野崎は方が悪い何方の御意でも參らぬ
と、此河與と連れになるを嫌ひ、好いた客と參れば方も構はぬか、其譚聞ふ」と
理窟張る、目玉の鬼門金神もなどやかに「コレ河與様、角が取れぬの、小菊とい

○帆柱立 帆柱の如くつ立つこと。舟に對する縁語を用ひた。

○二王 寺門の兩脇に立てる二人の金剛神。以て彌五郎と善兵衛とに喩ふ。

○詰開く 談判する。

○會津燧燭 岩代國會津地方から産出する燧燭で、花燧燭なごを描いてある。この文は會津客蠟九を嘲弄したのである。

○光立て 小菊の後援をして小菊の明りを立てる意に、燧燭の縁語を用ひてかくうた。「心切る」も燧燭の縁語。

○うぞ頼ふ 「薄頼(うそぶる)ふ」の「そ」を高つていふ、其の例は他にもある。

○借つた 東京語では「借りた」といふ。他の客が掲げてゐる遊女を我が方へ借受けた。

○ばいた 「赤言字考節用集」人倫門に「賤女」に「バいた」と振假名を附けてある。蓋し「端人(はびと)」の轉であらう。

○お山 遊女をいふ。(既出)

○鬼門金神 鬼門も金神も祟があるにて忌む方位。以て與兵衛が目をいからした惡魔の如き相好に喩ふ。

○などやか なごやか。柔か。災害を降す鬼門金神の如き河原の怒をなためるべく真綿で受けた。

○そだてられ 養育せられたの義、轉じて、おたてられ。

○色こそ見えね河原 「古今集」春上郡の歌、

ふ名が一ッ出れば、與兵衛といふ名は三つ出る程深い〜と、言ひ立られた二人の中、連れ立て參らぬも皆此方様のいとしさ故、人にそだてられ嫉けられ何じやの、妾が心は誓文斯うじや」と、ひつたり抱寄せしみる、色こそ見えね河原が悦喜、「エ忝い」と伸びた顔附客は堪らず傍にどうと腰掛け、小菊殿お身は聞えぬ、如何なる縁にか會津様程いとしい人は、大坂中に無いと言つたぞよ、國元の外聞身の大慶と、大事の金銀を湯水の様に川遊び、ちよがらかされにや來申さない、其男が聞前で、夕べの如く言はないけりやとや、通りのおむやの連關、二度と越し申さない、どうだ〜と責めせちがふ、言ひ合はせし二人の連れつか〜と寄て、ヤイもさめ、此女郎こつちへ貰ふ置て歸れ、但東國土産に川「春の夜の關はあやなし梅の花、色こそ見えね香やはかくる」の下の句に據り香を「河原」にいひかく。

○伸びた顔附 鼻毛の伸びた顔附。男が女に感觸して、なぶられるも知らぬ顔附。

○ちよがらかされ 嘲弄され。侮謔され。

○とや〜通りのおむやの連 無耶無耶の關は有耶無耶の關ともいうたやうで、障前と羽町との國境なる關址で、笹谷峠にあるといふ。但異説もある。「夫木抄」卷二十一の歌に「ものよふの出づさるるに枝折りするぞや〜とりのむやの連の關。」「そや〜通り」とは、往來たやすからねば、問ひつつ連

り通る意で、むや〜の關に通じる道。「むや〜」は、蠟九が立腹して心がむしやくしやしてゐる意をまきかした。詳しくは「近松語彙」を見よ。

○せちがふ せつく。せがむ。「菅原傳授手習鑑」第一に「さあぬかせ、せちがひか、れば」。

○もさ 在時東國人の言葉の終りに「モサ」を添加した。よつて東國者のことといふ。現今も田舎者を案内する者を「もさ引き」といふ。

○坂東 近頃、關東と相混じり、岩代國會津をも入れた。

○どう 「どう山伏」「どう御旗」などいふ「どう」に同じく、語意を強める接頭語。

○ぶい ぶつみてうるさく不平ないふ様、められて首もまはらぬ。

○臙膝も立たぬ 動きのこれぬ。發芝に苦しめられて首もまはらぬ。

○命の玉 聖丸の男の聖丸、女の乳房は男女の意所である。

○高がかけた 高が物を爪にかけ「飛去つた意、以「呆氣」にせられた事に喩ふ。

○南無三 「南無三寶」の略で、失敗した時にいふ語。(見索引)

○逆様に植えてくれん 土甲へ頭から逆立ちに打込んでやらう。

○毛才六 人を罵つていふ語。「毛才」は小才。「こにさい」の略稱。小才は背二才の意。「六」は遺露の露の義であらう。

○頸骨 頸骨のおもひはね。

○氣の通らぬ 物事のわからない。野暮な。

○柳 邪魔。

○舞込み砂 堤上から風などで舞込み込んだ砂。○扱ひ手 仲裁人。二人が川中での喧嘩は、川にはびつて仲裁する者もなからうから、「扱ひ手なき」といへるも道理。

の泥水振舞はふか」と、兩方より立袂み投げてくれんす面構へ、坂東者のどう強く、何さぶい、其、人威しの腕に色々の彫物して喧嘩に事よせ、懐の物取と聞及ぶ、貧乏といふ棒に臙膝を撲られ、腰膝も立ぬ遊女狂ひ、上方の泥水より奥州者の泥足食へ」と、つと寄蹴上る足首、刷毛が、臙膝違へられ、どうと轉んでころく、小川へだんふと撥落され、是はと取附皆朱が大事の命の玉、縮み込程蹴附られ、鷲がかけた南無三と、呆れて空を道々々、腹遣い、逃げて行方は無かりけり、友達投げさせ見て居ぬ男、逆様に植へてくれん」とむすと擱めば振放し、「やちよございなけさい六、頸骨引つ缺いてくれべい」と、食はず拳を請外しては撲返し、叩き合掴み合ふ、「なふ氣の通らぬ是どうぞ」と、中へ小菊が柳に入「ア、怪我さしやんすな大事の身」と花車が圍へば下女も手を引立隔つ、「そりや喧嘩よ」と諸人の騒ぎ、茶屋は店を仕舞ふやら、二人は絶體絶命の、撲合組合堤の片岸踏み崩し、小川にどう、落ち分れ、藻屑・泥土・舞込み砂、互に投げかけ掴みかけ、打合ひ打附扱ひ手なき相手勝負機根、較べと見へにけり、折こそあらめ嶋上郡高槻の家の子、お小姓立の出頭小栗八彌、馬上に社杯御代參の徒土若

○機根 根氣。精力。

○折こそあらめ 時もあらうに折懸く。

○嶋上郡 今藤津國三島郡に入る。

○高槻 當時の高槻城主は永井飛騨守直期（「なはざね」領三萬六千石。高槻町は今、人口約一萬二千）。

○家の子 家臣。

○小姓立 小姓（貴人の傍近く）に給仕する少年から立身した者。

○出頭 君側にあつて政務に與る武家の職名。

○濃柿 濃き塗染。

○智恵の輪 九つの輪連の塗様。

○手振 昔の行列には、其の先頭を大手を振り揃へ、足並揃へて成勢を示し、且つ警戒する供人の衆があつた。それを手振といふ。近松作「剛性爺合戦」千里が竹の條に「お先手の手振の衆やぐ忠左衛門かほちや右衛門。本曲この後文にも「振る手み揃へ尺揃へ行列立て、ぞ」とある。

○手繰りかけて 引摺（ひつさら）へ引摺へし。

○皆具 一切の馬具。

○栗毛 馬の毛色名。栗色で鬣の黒いもの。

○沛艾 馬の跳躍すること。李尤に「大馬沛艾」。この後の文に「跳馬」とある。

○はら／＼ 風れ散るさま。はら／＼。

○膝を脊骨に 森右衛門の膝頭で與兵衛の脊骨をの意。

○怪我 腫（は）げがしの義で、血に腫（は）げがしれること。

黨、揃ひ羽織の濃柿に智恵の輪の大紋、手振の先供「はい／＼、／＼」の聲

をも聞ず與兵衛が、手繰りかけて打泥砂、出合拍子に馬上の武士の袷袢。皆

具迄、ざつくと掛かるも時の運、栗毛忽ち泥附毛沛艾鞍も鎮まらず、與兵衛もは

つと驚く所「それ遁すな」と徒士の衆、はら／＼と取巻く中、相手は川を渡り越

し小菊も花車も手ばしかく、参りの諸人に紛れて退く、徒士頭山本森右衛門與兵

衛が、兩脇掻いてぎやつとのめらせ、膝を脊骨に拉ぎ附るニア、お侍様怪我

でござる御免なりませ、お慈悲／＼」とほゑ面かく「此奴慮外者、お小袖馬具に

泥を掛けて怪我と云ふては濟まぬ、面を上い」と首捻ぢ上「ヤア森右衛門殿伯父

者人」、「ム、與兵衛めか」と互にはつと驚きしが「ヤイ己れは町人如何様の恥辱

を取ても疵にならぬ、且那より御扶持を被り、二字を首に懸けたる森右衛門、慮

外者を取て押へ、甥と見たれば猶助けられぬ、討て棄る立ませい」と小腕を取て

引立る馬上の主人「ヤイ／＼、ヤイ森右衛門、見れば其方が大小の鞆口詰め

をいひ、轉じて、思ひがけぬあやまちの意にいふ。通矢。粗相。

○吹面かく 泣き顔をしてわめく。膝を上げて泣くを、ばえ

るしといふ。

○慮外者 無識者。不敬者。

○小袖 袷の大袖なるに對して、常の絹衣の稱。

○二字 武士をいふ。武士は通稱の外に二字の實名を有すれ

ばかくいふ。「二字を首に懸く」とは二字の實名の所持者即ち武

士の身分なるをいふ。

○鞘走る 刀身が鞘から自ら抜け出るをいふ。森右衛門が刀を抜かうとする心を察し、さうさせまいとてかくいた。

○手振驚 身振りはかりで嚇かない驚。この文は森右衛門が手振で心中を示す意と、供光の手振とをいひかく。

○意氣方 心はへ。氣まへ。

○南無三 (既出)

○上洩り 逆として正氣を失ふこと。

○暗 暗峠をいふ。大和國生駒郡と河内國中河内郡との境にある山路。近代奈良大阪間の道路は寧ろこれによつた。今はその北方に生駒隧道があつて、大軌奈良線が通じてゐる。

○加賀笠 菅笠の一種。加賀から産出したのを珍重したのでこの名がある。

○地獄の地蔵 地獄で地蔵軍に逢つて救はれる。その如く、お吉を地蔵軍に看做した。地蔵軍は六道に顯現して衆生を濟度される菩薩である。

○後生 人を救ふ善根は後生安樂の果報となる筈から、人に深く頼む時にいふ語。

○ぜり 競。こみあふこと。

○此方の人 己が夫七左衛門をさす。

○氣疎なげな 人氣ひみじし疎うしゆな義。

「なげ」の「な」は意を強める接尾語。「ない」の語根である。氣味わるゆな。怖ゆな。おそろしゆな。

様が緩るさうな、ふと鞘走つて怪我でもして、血を見れば殿の御代參叶はず、歸らねばならぬ、下向迄は随分鞘口に心を付て森右衛門供をせい、ハアはつ」とお詞 忝く、おのれ下向には首を討、暫しの命」と突放し、随分伯父が目に懸かるなど言ひたけれ共侍氣、聲せぬ夏の手振驚、「はい、武家の意氣方泥まぬ御馬足を早めて急がる、與兵衛うつとり夢か現か酔ひたる如く、南無三伯父の下向に切らる、筈、斬られたら死ふ、死んだらどうしよ」と心は沈み氣は上洩り、逃てくれうと駈出、ハア斯う行けば野崎、大坂は何方やら方角かない、此方は京の方彼の山は暗か、但比叡山か何處へ行たらば遁れう」と、眼も迷ひ狼狽へアどうかせう、何とか賀笠お吉と見るより地獄の地蔵、イヤお吉様下向か、私や今切らる、助けて下され、大坂へ連れて行て下され、後生でござる」と泣拜む、イヤ此方やまだ下向じやないわいの、七八町行たれど餘り人せり、此方の人待合せに爰迄歸つた、エ、氣疎なげな身も顔も泥だらけ、氣が違ふたか與兵衛様、「尤々喧嘩して泥を掴み合、跳馬に乗た侍に、その泥が掛かつてそれで下向に切らる、筈、頼ます」と立去らず、エ、呆れ果てた親御達の病に

○いとしばい 「いとほしい」の轉倒語。見索引
○けんく 慳々。つつけんぞん。「無言集覽」
に「人にと伊と伊とあるをケンケンズル」と云。

○とつと 疾く疾く。さつと。

○たしなましやんせ つつしみなされませ。

○長き日影 隆曆四月の頃は晝間が長いからかくいふ。

○中娘 お清六殿。

○べべ 衣服をいふ小兒語。蓋し着物はべら／＼なるもの故、その頭の一音、べを離らした語であらう。

○裸になつてぢや 裸になつてぢやといふのかど、子供の語をたしかめたのである。

○目を抜く 欺く。たます。「倭詞栞」に「新羅樂記に以謀殺人目に見えたり」。

○はたかり 開張の義。手足をひろげて立寄り。

○お晝 お晝寢。

○内儀 人妻を呼ぶ稱。おもに町人間の用ひられるが、町人でなくてもいふ。内方。

○頃 程合ひ。加減。

なるがいとしばい、向ひ同士のけんく共ならず、茶屋の内借つて振漉いで進せ
ましよ、顔も洗ひとつとと大坂へ歸つて、以後をたしなましやんせ、又爰借りま
すお清よ、父様が見へたら母に知らしやや」と、二人葺簀の奥長き日影も午に傾け
り、さぞや妻子が待らんと辨當かたげ片々に、姉を手を引豊島屋の七左衛門、咽
が乾けど呑む間も急ぐ、茶屋の前にて中娘、「アレ父様か」と縋り寄る、「ヲ、待か
ねたか母は何處に」と尋れば、「母様は爰の茶屋の内に、河内屋の與兵衛様と二人帯
解いて、衣服も脱いで、ござんする」。「ヤア河内屋與兵衛めと、帯解いて裸に成て
じや、エ、口惜しい目を抜かれた、そうして跡はどうじや」。「そうして鼻紙で
拭ふたり洗ふたり」と、聞より急ぎ立七左衛門、顔色變り眼も据り門口に立はた
かり、「お吉も與兵衛も是へ出よ、但出ずば其處へ踏ん込む」と、呼はる聲に「こち
のるか、子供がお晝の時分も忘れ、何處に何して居さしやんした」と、出る跡から
與兵衛が「七左衛門殿面目ない、ふとした喧嘩に泥に陥り、色々お内儀様のお世
話、是も七左衛門殿のお蔭、忝い」といふ小鬢先髪の鬘も泥塗れ、身は濡れ鼠腹
立やら可笑しいやら、挨拶もせず「是お吉、人の世話もよい頃にしたがよい、若

○尾籠びろう 「をこの當字の音讀。馬鹿侍たこも。
○疑あやはしい 養通の疑あり。

○姉あねが手を引き乙おとは抱だく お吉は長女の手を引く、末女を抱く。
○肩かたくま 「かたぐるま(肩車)ともいふ。小兒を肩に乗せて背に跨らせて擔ぐこと。

○法の教くわのくわう 佛法の教。この文は、佛法の教を聽聞に參ること、即ち野崎觀音参りをいう。そして「法」に「肩くまに乗る」をいひかけた。
○とほん 茫然たるさま。

○徒歩立たふたて 徒歩に出で立つこと。八彌はよじれた馬を従者に引かせて、徒歩してゐるのである。
○不祥ふしやう 不仕合。不運。因果。

○慮外者りがいしや 無慮者。慮外はおもひのほかの義、轉じて不慮の意にいふ。

○皆具みなぐ (既出)
○泥障でいぢやう 馬の脇腹を覆ひ、泥の跳上がるを防ぐもの。「質丈雜記」に「泥障はもこは雨天に衣服にはねつく泥を障る爲のものなり云々」。

い女おんなが若い男おとこの帯解おびといて、そうして跡あとで紙かみで拭ぬぐふとは尾籠びろう至極しごく疑あやはしい、餘所よその事ははからかしてサア〜參まゐふ日が闌たける、「ア、〜待まつて居ゐました委くしい事は道みちすがら」と、姉あねが手を引ひ乙おとは抱だく、中なかは父親おやのちち肩かたくまに法の教くわのくわうも一いっつは遊あそ山さん群集ぐんじゆを分わけてぞ急いそぎける、與兵衛おとべゑ一人茶屋ちややの店みせ、とほんとしてゐる所に、亭主ていしゆを始めはじめ四邊よっぺん在所ざいしょの者もの共ども五六人ごろうにん、先まにから爰こゝな人は參まりか下向げかうか、一いっつ所にうろ〜と合點がてん行いかぬ、サア通とほつた」と追立おひたつる、折せりから「はい〜」の聲こゑに交まじわる響くらわ音おと、小栗八彌おぐりやち下向げかうの徒歩立たふたて與兵衛おとべゑ狼狽ろうたへ逃にげ損なひ、押割おしる供先伯父ともさきおやの目めに、懸かかる不祥ふしやうの出合頭であひかしら引ひつ捕とらへ捻据ねぢずゑ、最前さいぜんは御參詣ごまかひ今は御下向ごげかう慎しんみなし、討うちて棄する」と刀たがひの柄つかに手てをかくる、待まちて〜森右衛門もりゑもん、その者もの討うちて棄するとは何故なぜ〜、「彼奴きやつは最前さいぜんの慮外者りがいしや、他人たにんならば少々せうせうは見遁みのがしにも致いたし、御免ごめんなされ下くだし置おかる、様やうの取とりなしをも申まうすべき所ところ、彼奴きやつが母ははは拙者せつしやが兄弟けいだい、現在げんざいの甥おい何共なんども助すけ難がたし」と申まうも敢あへぬに、「シテ其科そのがといふは何事なにごと」、「御尋おんたねに及およぶ御服ごふくに泥どろを投なげ掛かけ、御身ごみを汚けがしよごしたる科が」、「否々いな此八彌このやちが身みを汚けがせしとは心得こころえず、是見これよ著類きりのいづくに泥どろが附ついたるぞ」、「イヤ召替めしかへられぬ以前のいぜんのお小袖こそで」、「されば〜、著替きかゆれば泥どろを掛かからぬも

○名字にかかると去らず 何某が恥辱を受けたと、名譽を毀損されてはいかんともしやうなく、懇懇すべきであるこの意。

○泥水 人間の糞糞はなくて泥水程な者で、意に介するに足らずこの意。

○泥より出てゝ蓮 「古文真寶」後集卷之二 周茂叔の愛蓮説に「蓮之出淤泥而不染云々。泥水泥」と同音語につづけた文飾。

○蓮の八彌 同じ頃の音によつた所謂別韻法。

○振る手を揃へ足揃へ 行列の先頭をする手振の衆の動作である。この前文にある「手振」を見よ。

○三重（見索引。この文は、三重あるが故に「歸らるる」を略した。

中之卷（河内屋内）

登場人物の主な者

油屋講中の人々

お 澤（與兵衛の母）

白稻荷法印（生奥山伏）

與 兵 衛

（河内屋の二番息 子二十三歳）

徳 兵 衛

（本天満町油商河内屋の主人。與兵衛の繼父）

河内屋太兵衛（與兵衛の兄）

お か ち（徳兵衛の娘）

梗概

山上ヶ嶽に参詣した油屋仲間講中の人々は、無事に峰入を終へ、咒文を唱へ法螺貝を吹いて河内屋に立寄つた。そして徳兵衛

女殺油地獄

同然では有まいか、「御意とは申ながら既に御馬の鞍籠も泥に染み、お徒歩でお歸りなさるゝは、旦那に恥辱を興ゆる慮外者」と、申上ぐれば「黙れ〜、馬の皆具には泥のかゝる物故に、泥障といふ字は泥を障つと書く、泥のかゝらぬ物ならば何しに障つるといふ字の入べきぞ、恥辱も慮外も科もなし、武士たる者の恥辱とは只一筆の濁り水も、名字にかゝるは洗ふに落ちず滌ぐに去らず、あれら體の雜人身が目からは泥水、泥より出て泥に染まぬ蓮の八彌、名字は汚れぬ助けてやれ」、「ハアはつ」と又有難き、御意を大事に振る手を揃へ足揃へ行列、立て、ぞ

夫婦と挨拶を取交はし、「與兵衛が山上參りに加はらなかつたのは病氣でもあつたか」と尋ねた。徳兵衛夫婦はこれに答へて、與兵衛の放埒や、おかちの病氣の事などを話した。講中の人達は之を聞いて、「おかちの病氣平癒の祈禱には、近頃はやる白稻荷法印を頼んで上げませう」と語り、別れを告げて去る。

與兵衛の母お澤は、早く父と死別した與兵衛を不便に思つて愛に溺れる。又繼父徳兵衛は、先代の主人に使はれた雇人で、それがお澤の後夫になつたのであるから、何くれと故主人の子に遠慮して嚴格な訓戒をせず、我が娘おかちに婿を取つて家督を譲ると騙し、以て與兵衛の改心を促した。

我儘に育つて不良兒となつた與兵衛は、高利貸から金を借りて遊興に浪費し、その返済に窮し、伯父山本森右衛門から頼まれたと偽つて母を騙した。また繼父をも騙して金を出させ、之を我が返済金に充てようとした。然し繼父は太兵衛の告によつて與兵衛の偽りを看破したので、與兵衛は更に病める妹おかちに言合せて非を遂げようとした。折から招かれて來た白稻荷法印が、おかちの加持祈禱に取りかかつた。其の祈禱は出鱈目のものであつたが、その爲に與兵衛は我が工みの成らぬを悟り、怒つて法印を落間に突落し、繼父を蹴飛ばし、おかちを踏附ける。

この時母はおかちの藥を求めて歸り、この有様を見て驚き、與兵衛を打擲しようとして杖を押取れば、與兵衛之を挽取り母に撲つてかかる。徳兵衛は之を見かね、與兵衛から杖をもぎ取つて打ちする。「この徳兵衛は親でありながら其方を主筋と思ひ、手向もせず存分に踏まれた。實母に向つて今の態は恐れ多くて身が顛ふ。今撲つたも私がしたとは思ふな、先徳兵衛様がお打ちになつたのだ」とて、涙にくれて教訓する。母は後夫に對する義理を慮り、「エ、口で言うて聞くことか、出て行け、ぐづ／＼すれば町中を呼寄せて追出す」といふ。與兵衛は町中といふにぎよつとし、悄然として家を出る。繼父はこれを見送りながら、「彼が後姿は故禮那に生寫であるを見るにつけ、禮那を追出す心地がして物體ない」とて愁歎する。母はうはべばかり手強く出たものの、可憐に堪へないで涙に袖をしぼる。

與兵衛は繼父の遠慮と實母の盲目愛とによつて我儘に育ち、次第に増長して遂に放蕩無頼の徒となる。これ等の者の常として、酒色に溺れ金策に窮し、親を騙さうとして成らず、暴戻の行を敢てし、遂に放逐されるに至る。其の間の徑路が情味豊かな筆で鮮かに寫されてゐる。そして両親はこの騙兒の後姿を見送つて悲歎の涙に暮れる。其の涙は又其の罪を惡んで其の人を惡まぬ巢林子の同情の涙である。讀者も亦この愛の筆に動かされて貫泣きをするであらう。

中之卷

- 掲諦々々：波羅僧掲諦 「般若心經」の中にあつて、自他總て成佛して彼岸に到る意の咒文。
- 唵呼盧：摩登祇 善師如來真言小咒で、「藥師如來觀行儀軌法」の中に見えてゐる。唵は歸命の意。句讀未詳。無能勝の咒であるといふ。
- 唵阿毘羅吽欠 胎藏界大日如來の咒文。無上菩提を得て四魔を降伏し、満足一切智慧明を説いたものといふ。
- 山上講 大和國山上ヶ嶽（大峰）峯詣の講中。
- 俗體 僧衣を着けぬ俗人のさま。
- お山 大峰參詣即ち峰人（お山）。
- 院號 年功を積んだ先達は山伏格に准じて、何何院と院號をうける。
- 新客 初めて降入する者。
- 十二燈組 燈明錢を奉納する講中。十二は十二ヶ月を意味し、組は連中又は社中の意。
- 金剛杖 山伏の持つ杖。「修驗抄」に「金剛杖者」とあり、口傳に「金剛杖者：四方四面顯發心修行」とあり。

「掲諦」は波羅揭諦、波羅僧掲諦掲諦、波羅揭諦波羅僧掲諦、唵呼盧呼盧旋茶利摩登祇、唵阿毘羅吽欠、おん油屋仲間の山上講、俗體ながら數度のお山、院號請たる若手の先達新客交り、十二燈組吹出す法螺の甲斐くしげなる金剛杖、腰に腰當首に珠數巾、著代の水呑、河内屋徳兵衛店先に立寄り、「何と與兵衛内にか、講中何事無ふ、お山勤めて有難い今日の下向は知れた事、念比な友達は桑菩提涅槃四徳、方各一寸五分、合而六寸、表地水火風空識六大長同行者之身量」。

○ 桑津 大阪市住吉區桑津町（大玉寺の東南）。山上歸りの人をこの地で出迎へたのである。

○おぬし 御主。同輩目下に着ひる對稱代名詞。おまへ。

○利生 利益衆生りやくしゆじやうの義。利益「りやく」。

○行者様 役行者、えんのぎやうじや、即ち役小角をいふ。山上ヶ嶽の大伽藍には藏士権現に役行者を祀る。そして行者の修行場となつてゐる。

○小篠の坂 金峰山藏士権現から天川へ通じる路に當り、一里許の所にある。峰人の人々はこゝで演奏する。

○お山 六峰山の修験者をさす。

○世の中直る 今まで不景氣であつたのが、好景氣になはる。

○下がり口 米價がさがる端緒。

○おぢや お出であれ。

○ののめく 聲高に廣ぐ。

○どろ 緋ないこの義。なまけもの。放蕩者。

○行者講 役行者の信者もが寄合ひ、奉加寄進峰人なむをすの結社。

○四貫六百 續四貫文に金一兩替とし、金二兩を紙拾圓相換すれば、續四貫六百は紙拾圓に當る。然し金講は現今よりも遙によくさいた。

○順慶町 今大阪市南區内の町名。

○どこに どこに何をしてゐるのか。

○どろく 放埒。放蕩。蓋し「どろく」は「むらける」の義であらう。

津まで迎ひにじや、おぬし一人見えぬは氣色でも悪いか、忝い御利生見て来た、
 是が土産先話さふ、西國者とやら、兩眼潰れた十二三な盲目が、大願かけて山上
 し行者様を拜む中、兩方共にくはつと開き、小篠の坂を杖もつかずつ、つと下が
 る、お山の衆が考へ、ア、有難い、此秋が世の中直る御告、あれ合點行かぬか、
 小さい盲目は小盲目、即米藏開いて、やすくと下り坂は下がり口との教へ、手
 透なら夕方おじや、色々お山の咄で旅の疲れを晴そう掲諦、掲諦くととの、め
 きける、親徳兵衛走出、若い衆下向か殊勝にごさる、此方のどろめは山上參りの
 行者講のと、今年も身共が手から四貫六百、順慶町の兄太兵衛から四貫、以上拾
 貫近ひ錢取てどれどに迎ひにも出居らぬ、神佛の罰も思はぬどろく者、友達甲
 斐に引締めて意見、頼まする」といふ所へ、奥より母親兩手に茶碗、なふくと目
 出度い下向、マア一ツづ、參れ、こちの與兵衛が山上様へ嘔吐いた其咎めが、妹
 娘のおかちが十日ばかり風引て枕上らず、醫者も三人替へても今に熱がさめかね、
 節供は近附婿を入れる談合極り、先からは急いで来る何かに附て女夫の苦勞、皆與
 兵衛ののらめが行者様へ嘔吐いた祟り、お若い衆お詫の祈禱頼ますしと、しみく

○がい 正しくは「が」がひ即ち價であつて、價値又は詮の義。

○節供 端午(五月五日)の節供。

○だんかふ(談合) 「だんかふ」を濁るは正しくない。昔は「か」を濁らす。こも濁つてない。

○のら 放蕩ののらくら者。

○役行者 文武天皇の時代、大和の人。咒術を詠くし、鬼神を驅使したといふ。金峰山寺などは役小角(えん)のせうかくの開基である。

○若輩 未熟者。

○脇がかり 本人でない脇の者に崇ること。この文は、役行者にもある佛が、與兵衛を憚つて其の妹に崇るやうな、若輩らしい事は決してなさぬとの意。

○法印 もミ學徳兼備の高僧に任じた位であるが、江戸時代には醫師又は畫工に授け、又は俗に山伏を法印といふ。こも山伏をいふ俗稱。この法印は新釋の言葉に、「釋阿大明神の使者白狐の教(ウツク)といふによつて、白稻荷法印といふ。

○加持 加は力を與へて加護する義。持は攝持して失はぬ義。繩結を用ひ、或は印相を結び、陀羅尼「だらじ」を唱へながら、佛の加護を祈る咒法。

○眞言 陀羅尼のこと。諸佛不思議の密語なるが故に咒といふ。

○ちり／＼はら／＼ ちらはるさまに、般若心經」の咒文をいひかく。

○順慶町 (既出)

語れば講中の先達、「いや／＼お山の祟りなれば與兵衛に罰が當る筈、役の行者共云はる、佛が、若輩らしう何の脇が、りなされう、娘御の熱病は又外の事、その様な煩ひには薬も醫者も入らぬ事、皆様知らずか、あんまり奇妙で異名を、白稻荷法印と申今の世の流行山伏、與兵衛も定めし知つて居よ、此法印を頼めば本復はたつた一加持、これから直に立寄、頼むに否は有まい」と語れば悦「ナフ／＼忝い、是も行者のお知らせ私は醫者殿へ參ります、是でゆるりとお休み、／＼」と立出れば「いや我々も面々の、親々妻子の顔も見たし、互に無事で悦」の貝吹く降伏惡魔を祓ふ眞言の、聲もちり／＼はら「波羅揭諦、唵呼盧呼盧」に別れ歸りけり、逆な弟に似ぬ心、順慶町の兄河内屋太兵衛用有げにも浮かぬ顔附、ヤ太兵衛来てか、おかちが氣色見舞か、書出し何か忙がしい時分、見舞には及ぬ事」と、言へば太兵衛傍近く寄、「母には道でお目に懸り、立ながら委しう物語り致せしが、高槻の伯父森右衛門様から、たつた今飛脚の状に、物怪な事が云ふて來ました見さつしやれ、跡の月御主人の供して野崎參りの折節、ごくどうの與兵衛め

○書出し 商人が得意先へ出す掛賣金請求の勅定書。端午の節供前だから掛取などの支度で忙しいのである。

○物怪 意外。不慮。

○ごくどう ならず者。無賴漢。「優訓采」に「ごくたふ」俗に人を罵る詞にへり、言句絶の義なるべし、言語通斷といふが如し。蓋し「言句通斷」の時であらう。

○尻の解けた錢差 諺に「後しりしも結はぬ
糸」。

○錢差 錢の孔を貫ぬいて束ねる細繩。昔は百文
(其の實九十六文)づつ穴に細繩を貫ぬき束ねてあつ
た。

○籠で水汲む 無効なこゝの喩にいふ諺。

○釘應へせぬ 諺に「釘が利きかぬ」。「鎌に
釘しといふに同じ。意見しても何の役にもたぬ意。

○サアこなた 勘當なされ 太兵衛の詞。

○どろく (既出)

○したいがい 刑目(きまめ)あらせうと思
ふままに。「がい」は正しくは「がひ」であつて假の籠。

○名跡立て 名字の跡目を立てて繼ぐをいふ。
河内屋の滅びぬやうに跡を立てて下さつたの意。

○悔 懺悔し速償すること。

○思はぬ心置かる 思うてはゐない事まで
も、與兵衛の爲に思ふやうになつて氣がぬする。

○因果晒し 業(ご)を曝し。前世の惡業の報に
よつて此の世で恥をかくこと。

○者にならず ならず者。無類漢。

○死次第 死放題。「次第」は、放題、まかせ、
ままの意を示す接尾語。

○如來かけて 如來に誓をかけて。佛に誓つて
の意であつて自誓の詞。

○づつない 「じめつない」(術無)の轉訛。せん
すべなきをいひ、轉じて苦痛烈しく胸苦しきをいふ。
せつない。

女殺油地獄

彼奴がきつと覺へて居る、噂も初はおか様の内儀様のといふた人、伯父森右衛門殿
が料簡で、其方が家を見捨て、は後家も子供も路頭に立、とかく森右衛門次第に
成てくれと段々の頼故、親方の内儀と此如く女夫になり、親方の子を我子として
守立てし甲斐有て、其方は自分の獨り稼ぎも召さるゝ、與兵衛めに商ひの手を廣
げさせ手代も置、藏の壹軒も立る様にと足搔いても、尻の解けた錢差、籠で水汲
む如く跡から抜け、壹匁儲ければ百匁遣ふ根性、意見一言いひ出せば千言で言ひ
返す、エ、元が主筋下人筋の親と子、釘應へせぬ筈身の境界が口惜しい」と齒を
くひしげれば、サアこなたの其正直を見抜いて、どろく者めが爲たいがい踏附
る、親仁様の陰でこそ、親子三人橋にも寝ず、人の門にも立たず名跡立て下され
た、其恩徳は本の親にも變らずと毎度母も其悔、子供に遠慮有からは、現在腹に
宿した母にも氣かねが有かと思はぬ心置かるゝ、因果晒しの者にならずに飽き果
てた、太兵衛頼む、江戸長崎へも追下し死居らは死次第、二度面も見度ふない、
微塵も愛著残らぬと、如來かけての母が言分からは何御遠慮、勘當なされ」と評
議の聲に目を覺し、サア、づつない母様、母様はまだ歸らずかと、おかちが苦

○扱は：お暇申す 太兵衛が徳兵衛にいふ詞
一段々々 ひこしは結構。

○高槻の返事 高槻の伯父山本森右衛門への返
事。

◇「踏縮めもなく」「滑り」「油屋」「絞り取られ」
「汗は夏」は油の縁語。

○汗は夏 重ゆに見せても其の質程い油桶を荷
つてゐるのであるから、その爲に汗が出るのではな
く、夏だから汗が出る意。

○山ぶ「山ぶし」(山伏)の略。

○附物 遺物。取附き物即ち物の怪「け」。憑「か
か」りて祟るもの。

○香婆 梵語「yaka」天竺の名醫。生れる時針
筒・薬囊を持つてゐたといふ。徳又戸羅國で七年間
醫術を學び、以て名醫となる。

○いはれぬ 謂れない。無用な。

○母者人には言うたれど この事後文にお
澤の詞に「おのれ先度も高槻の伯父御が、お主の金
を引負ひしと能うも〜此母をぬく〜と歎したな
ア」と見えてゐる。

○四ッ寶 正徳元年二月壽遊した悪質の樂貸、
享保銀の四分の一しか價値がない。金二兩に享保銀
五〇匁七分替とし、金一兩を二十圓相場とすれば、
四寶銀三貫目は三百圓に足らず。

○引負ひ 人の金をなぞを預つて自分が融通し、
損失をして其の責を負ひ。(見索引)

しむ屏風の内、門には「物申、河内屋徳兵衛殿は此方か、山上講中頼みにつけ、
稲荷法印御見舞申」と案内す、扱はおかちが祈禱なさる、か一段々、私は高槻
の返事が急ぐ、お暇申」と表に出、「徳兵衛宿に罷在る草々御出忝し、あれへ
お通り遊ばせ」と、太兵衛歸れば法印は端の間にこそ通りけれ、踏縮めもなく、
世の中を、滑り渡りの油屋與兵衛賣溜錢は色狂ひ、絞り取られて元も利も滓も殘
らぬ油桶、重げに見せる、汗は夏、中は涼しき明樽を、荷ふて宿へ歸りしが、ヤ
珍しいお山ぶ、此方は見知つた白稻荷殿、妹が病氣祈りの爲か、あの附物が、其
方衆の祈りで退いたら此與兵衛が首賭け、母者人は藥取りにか、著婆でも行かぬ
死病いはれぬ氣骨折らるゝ、ヤこれ親仁殿、おかちが煩ひより何より大事が有、
其當座に母者人には言ふたれどそれよりはつたりと打忘れ、今日ふつと思ひ出し
商ひ止めて歸つた、跡の月野崎で伯父森右衛門様に行合、わざ／＼飛脚も遣る所
幸の便親達へ言ふてくれ、主人の金四ッ寶三貫目餘り引負ひ、此節季に立てね
ば切腹か縛り首一生の無心、兄太兵衛は義理も法も知らぬ奴、沙汰なしに三貫目
調へ、與兵衛に持たせて下されと段々の言傳、貳貫目や三貫目で伯父に腹切らせ

○節季 端午の節季をいひ、支拂勅定日は五月四日。

○立てねば 勅定を立てねば、支拂勅定を濟さぬは。

○際 節季。

○伯父の文の裏表 森右衛門の文面に就いて、前に太兵衛が言うたものと、ここに與兵衛が言ふとは、正反對の行き方で、太兵衛は表をいひ、與兵衛は伴つて丁度その裏をいふ。

○おぢやらぬ ござらぬ。

○鈍な 愚鈍な。あほう伊た。

○胸算用 むぶづもり。この語は「むねさんよう」ともいうた。西鶴撰世間胸算用の巻頭「胸算用」に「むねさんよう」と榜調してある。

○薬師如來の縁日 薬師如來の縁日を十二日とするは、薬師如來十二の誓願の縁に據つたものであらう。

○十五は阿彌陀 稲算は二月十五日に入滅された。十五日は釋尊の忌日で、即ち阿彌陀の縁日である。

○法藏比丘の淨瑠璃 「法藏比丘いひふ懸名の脱離淨瑠璃をいひ、六段のものであつて、阿彌陀と薬師とはも天婦であつた事が作つてある。

○見入れ 物の怪(け)がミリついでる(こ)に。
○圖に乗り 思ふつほに乘氣(まき)なり。

て、此方衆の外聞世間が立まい、今日は二日際といふて明日明後日、萬事を差置

今日の中三貫目調へて渡さつしやれ、明日夜明に駈出せば午迄に行て戻ると、

たつた今直筆の伯父の文の裏表、憎く可笑しく、如何な伯父でも、主の金引負ふ

様な侍、腹切らせたがまし、何じや小澤山に三貫目、三匁もおじやらぬ、おぬし

が商ひ去年から一文も見せぬ、算用したら三貫目や四貫目は残る筈、遣りたくば

其銀やれ、追附婿を呼入る、大事の娘が病氣鈍な評定する際がない、ヤ法印様

お待遠、おかちが様體御覽なされ下され」と餘の事言ふて取合はず、ヲ、く、

手柄に婿が呼ばれれば呼ふで見や、見物せう」と親の前に足踏み伸し、算盤枕の

胸算用ぐはらりと違ふて見へにけり、父がそろく抱起すおかちが顔の面裏れ、

法印とつくと見、ム、年は幾つ、「十五」、「病み附は」「跡の月十二日」、「ム、

薬師如來の縁日、十五は阿彌陀」と懐中の書籍繰廣げ指を折、仔細らしき聲附、

「抑も法藏比丘の淨瑠璃に曰く、阿彌陀と薬師は御夫婦と云々、則此病は一時

も早く婿殿を呼入、夫婦になりたいと思ふ氣病に、少外の見入れ有」と言ふより

徳兵衛尤顔、法印圖に乗り、「稻荷大明神の使者白狐の教へ、髮筋程も違はぬ祈

○加持 (既出)

○比叡山の二十一社 日吉神社をいひ、舊説によれば山王二十一社と號す。この文は「冷す」に「比叡」と同じ音によつていひつづけたのである。

○江戸 淨瑠璃節の一派なる江戸節をいひ、江戸半太夫の創作である。

○阿闍佛 あびつと 無冠で袈衣相、薩摩の印を結び、蓮華座の上に坐せる佛。

○走り人 出奔人。

○金縛り 不動明王が左手に持つてゐる繩を羅索といひ、難伏者を縛縛する意をあらはす。この繩で縛られた者は、如何なる者も解くことができぬによつて、之を金縛といふ。

○咳氣 風邪。

○風の宮 伊勢大神宮境内の風日祈宮。

○白鬚明神 近江國滋賀郡打下濱(江若鐵道白鬚驛前)にあつて、祭神は菟田彦命。

○白髮薬師 謡曲「白髮」に、「一萬歳の薬師があるによつて、かくいうたのであらう。

○地藏菩薩 若衆は男色關係で痔疾の者多きにより、痔をいひかけて地藏菩薩といふた。

○あざふの明神 めくりかゝるた四十八枚の札の中の札の名に「あざ」といふがある。そして骨牌はもと麻布で造つたによつてそれをいひかけ、明神を添へて神様の名のやうにした。

○釋迦牟尼佛 めくりかゝるた四十八枚の札の名に「しゃ」といふがある。それに釋尊の稱號をい

加持も藥同然、神佛にも其役々、熱病さまし冷すには、比叡山の二十一社、温む

るには熱田明神、頭の病は愛宕權現、足の病は阿闍佛、走り人盗人、動かせぬは

不動の金縛、咳氣を祈るは風の宮、老人達の老病には白鬚明神・白髮薬師、若衆

の病の祈りには大慈大悲の地藏菩薩、かるたの繪の附祈禱にあざふの明神釋迦牟

尼佛、鯛取の祈りは、四三五六社大明神、八ッこう七の社、別て此法印が得物、

錢・小判・俵物の相場商ひ、上げふと下げふと高下は自由、持のお方が値上げした

い祈りには、強氣に、上り高天が原の八百萬神、果した衆の下がりを祈るは、高

きお山を時の間に麓に下がる、嗟峨の釋迦、安井の天神、持と果と兩方一度の祈

りには、高からず安からず中を取て河内の國、高安の大明神、法力のあらたな事

棚な物取て来る如く、禮物は大方三十兩、何時でも受取、いで一祈り」と錫杖

振立いらたか珠數さらりくと押揉んだり、印をもいまだ結ばぬに病人重たき顔

を上、なふ祈りもいらぬ祈禱もいや、おかちが病直すには婿取の談合止めてたも、

あの與兵衛が若氣故借錢に責めらるゝ、其苦しみが冥途の苦患是ぞ呵責の責めと

なる、流れ勤めの女子なりとも、與兵衛が契約の思ひ人を請出し嫁にして、此所

ひかけた。

○膺取 賭博の親をすること。膺はも三筒である。

○四三五六社大明神 雙六の采目の数を利かせて、四三の社、五所明神、六社をいひかけたのであらう。

○ハツから 八講で、「比良八講那れ」の謠に據つたもので、近江國滋賀郡比良の天神をいうたのであらう。

○七の社 京都市上京區大宮通原山寺上ル西入社横町にある七野郷の氏神(指定村社)櫻谷いぢひたに七野神社の事である。石井琴水氏の説。

○持 米を持たんで相場の昂(あがり)を待つこと。

○強氣 相場のあるる氣配。

○果した衆 米を賣り果した衆。「果はた」は把多とも書き、賣るをいふ。「賣賣出世草」に「把多はた」賣をはたし云、物の多きをさると云ふ心なり。

○嵯峨の釋迦 京都市右京區嵯峨町釋迦堂清涼寺。本尊の釋迦如来立像は、尙然(たねん)の將來と稱し、三國傳來とも稱する有名な木像であつて、今は國寶なる。

○安井の天神 大阪天王寺西門筋西邊、清水の南にある。

○高安の大明神 河内國中河内郡高安村字神立にある玉祖神社。

○錫杖 僧侶・山伏などの持つ杖。上部は錫、中部は木、下部は角又は牙で作り、頭は塔婆の形をなし、これに數箇の環を附け、振れば鳴る。

帶を渡してたも、是非に婿を取らばおかちが命は有まいぞ、思ひ知つたか思ひ

知れ」と四邊をきろく、睨め廻し「ア、つ、ない苦しい」と悶へ戰慄きをぐる言、

父は驚き色違へ、法印少も臆せず、汝元來何處より來る疾つく去れ、行者

の法力盡くべきかと鈴錫杖をちり、んがらく、急々如律令」と責めかくる、

與兵衛むつくと起き、何を知つて去れ、どう山伏置居れ」と落間にがほと突

落せば「ア山伏の法を知らぬか、験を見せずば置まじ」と、駈上りりんりん鈴り

ん、引摺り下せば又駈上る不動の眞言どたくはつたりばつたりだ、引摺り

下され山伏も錫杖がら、命から、歸りけり、與兵衛親の側に膝まくり、

いらたか珠數 山伏などの持つ扁平な珠より成る念珠。

○印 梵語マニの譯。佛、菩薩の内證の本誓を事相の上に表示し、手指で種々の形象を結ぶことを印を結ぶといふ。

○たも たもれの略。たまはれ。

○呵責 地獄で獄卒に責めさいなまれること。

○流れ勤めの女子 遊女を流れの女とも勤めの女ともいふ。遊女を流れの者といふは、遊女はも水邊船着場によく住んで、船の中でも客に接したによつて稱したものである。(露方に散りし流轉するの義ではない)。

○急々如律令 (既出) 速に去つて濡るを得ざる義であるといふ。も道敷から出た。「異俗佛事編」に「此火災を伏し、病を癒し

むる兜術語なり」とある。

○どう山伏 「どう拍撲(ずり)になきいふ」どうと同じで、罵る意をなす接頭語。

○落間 床(ゆか)の一段低くなつた所。

○駈上りん 「駈上り」に、鈴の音、りん、をいひかけた。

○不動の眞言 曼荼羅(三多)ノマクホトマンタ(歸命普賢總日羅敷(バラタ)ノ羅刹)の咒、格闘の騒ぎを形容したドサクサバタノを結び合せて、「どたくたどはつたりはつたりだ」というた。

○から からうじて、やつと。「がら」「から」

と類似音によつた文飾。

○ほたえあがれ ふざけあがれ。つけあがりやあがれ。

○跡式 遺産。

○名跡 名字の跡目。(既出)

○わごりよ そなた。おまへ。男にも女にもいふ。こは與兵衛をさす。ごりよ(御料)は御料人の略。貴人の子息・息女の敬称に用ひ、他人の妻の敬稱にもいふ。極調柔に「料」を解して「古へ何かね」と稱する如く、其儲の意あるにや」とある。

○お山 遊女をいふ。(見索引)

○死靈の憑いた 死人の靈靈がまじついた。

○圓滿であるべき河内屋の家庭が、不心得な與兵衛の爲にかき亂されて憂苦に目を送る。これには不良児の生立ちに就いて深く考へねばならぬことを暗示してゐる。

○利く事ぢやないぞ いかにお謝罪(あやま)つたして、彼に立つ事ではないぞ。「利」は原文「利」とある。斯く書ける例は他にもある。

○いき女郎 人を叱罵する時、其の言葉を強める爲に、「いき(生)又は「し」(死)の語を相手を指す詞の上に添へていふ。

「是親仁殿、今のそごる言耳へ入たか、死んだ人を迷はせ地獄へ落しても、此與兵衛が好いた女房持たせ、所帯渡す事は否か成らぬか」、「ヤイ囂しい、四邊隣もあぞかし餘程にはたへあがれ、此徳兵衛は、死んだ人の跡式取らいでも、五人七人はゆるりと過る術知つたれど、年忌命日も弔らひ、地獄へ落さず迷はせまい爲に名跡嗣いで苦勞する、我御料が好いたお山請出し女房に持たせ、半年も経たぬ中、所帯破つて親方の弔ひもならぬ様には得せまひ」、「扱は是非婿取て、妹に所帯渡すな」、「ヲ、渡す」、「ムウ能ふ言ふた道知らずめ」と立上がり、俯向に踏みのめらし、肩骨脊骨うん／＼と踏みつくる、「なふ悲しや淺ましい兄様」と、妹が絶れば、「おかち構ふな、彼奴が腹の癒る程、存分に踏ましや／＼」と、身も働らかず座も去らず、妹堪へかね「あんまりな兄様、私は何も知らぬ者死靈の憑いた顔して此様に／＼言ふてくれ、それから商も精出し、親達へ孝行盡し逆らふまいとの誓文立て、それが嬉しひばかりに病ほうけた此態で、怖い／＼恐しい死人の眞似して嘔吐かせ、父様を踏んづ蹴つそれが親孝行か、年寄つた父様目でも眩ふたら、それは／＼利事ぢやないぞ」と緋り取附泣わめければ、い

○憎い頬桁 憎らしい口。しやべるを口を叩くといひ、強めていふ時、頬桁を叩くといふ。

○目鼻もいはせぬ 目たきて鼻たきて、それに容赦はせぬ。

○業晒し 前世の悪業の報を受けた輪廻を此の世にさらすこと。恥さらし。

○提婆 提婆達多(Devadatta)の時。當て惡逆の行多く釋尊の法敵であつた。よつて惡逆無道な者に喩ふ。

○すね 脚のこゝ。

○おとまし うごまし(癡)の轉。思みきらはし。

○五體 筋脈肉・骨皮毛、或は頭・兩足・兩手をいふ。轉じて全身。

○下げぬ ぶら下げぬともいひ、持たぬといふ事をいやしめていふ。

○差す手引く手 舞の手の名。手を伸べるを差すといひ、手をさめるを引くといふ。よつて何事につけても差にいふ。

○ぬく〜 温々ぬるい。テラ〜しい、ぶぶさい、などの意をなす副詞。この文は、前文に「母者人には言ふたれと」とあるに應じ、その時母は與兵衛の偽を信じてゐたことが知れる。

○一分 一身の面目。

○其時 母がおのれにぬく〜と教された其時。

○つか〜 忌憚なく奮勵するさま。近松作、大經師普磨「下之卷」に「首桶ひつさけつか〜と出で」。

女郎め、吐かすまいと誓文立て、口堅め、憎い頬桁、死靈より此與兵衛といふ生

靈の苦しみ、覺えて居れ」と同じくがはと踏み伏せたり、「病み疲れた妹を踏み殺

すか畜生め」と、取附父親はつたと蹴飛ばし、「腹の癒る程踏めと言ふたな、是で腹

を癒るわい」と、顔も頭も別ちなく散々に踏む最中、母立歸り、はつとばかり薬

投棄て、與兵衛が鬚引攔んで、横投げにどうどのめらせ乗かゝり、目鼻もいはせ

ぬ握り拳、ヤイ業晒しめ提婆め、如何な下人・下郎でも踏むの蹴るのはせぬ事、

徳兵衛殿は誰じや、己れが親、今の間に其脚が、腐つて落ちると知らぬか罰中り、

疎ましや〜、腹の中から盲目で生れ手足不具な者もあれど、魂は人の魂、

己れが五體何處を不足に産み附た、人間の根性なせ下げぬ、父親が違ひし故母の

心が僻んで、悪性根入ると言はれまいと、差す手引手に病の種、己れが心の劔で、

母が壽命を削るわい、おのれ先度も高槻の伯父御が、お主の金を引負ひしと能ふ

も〜此母をぬく〜と欺したなア、たつた今兄太兵衛に行合、己れが野崎の暴

れ故伯父は侍一分立たず、浪人し大坂へ下るとの便、己れが嘘が露はれた、其

時母がつか〜と親仁殿へ話し、跡で知れては扱は親子の言ひ合と疑はれ、夫婦

○因果晒し 業晒（いふざらし）し。

○ナフ兄様：下され おかちの詞。

○初（あま） 物を兩端に掛けてになふに用ひる様。てんびんぼう。

○わごりよ （既出）。ここはお澤をさす。

○物體無い 様體の滅び無くなる義、轉じて、おそれ多いの意にいふ。

○他生の重縁（ぢゆうえん） 「他生（たせい）は今生に對する語で、今世以外の諸世界に生れ出た際に結んだ因縁を重ねるしやう。

○痘瘡 天然痘のこも。昔は痘瘡豫防の法がなかつたので、兒童は必らず一度は痘瘡にかかり、そして生命取りの病氣と見られてゐた。

○日親様 日蓮宗の高僧で、京都本法寺の開祖。この文は、大阪生玉中寺町正法寺の日親堂に願をかけたのである。

○百日法華 「増補傳言集覽」に「他宗の者病なを斬るがため、一時日蓮宗になるをいふ」。

○ほつく 「ほつく」の轉。金銀などを浪費する。この文は、自分は盾に天秤棒をかけて物になひ、縁いで金をまうければ、そのまうける程與兵衛めは

の義理も缺け果てる、内でも外でも己れが噂ろくな事は一度も聞ぬ、其度毎に母が身の肉を一寸づゝ、殺いで取様な因果晒しめ、半時も此内に置事ならぬ勘當じや出て失せう、出去れ〜と撲つゝくはせつ、叩く片手に押拭ふ涙手の際なかりけり、此與兵衛が爰を出て何處へ行く所がない、コヲ、己れが好いた、お山が所へ出て失せう」と小腕取て引出す、ナフ兄様追出し私は此跡取事いや、堪へて進せて下され」と取附ば、何知つて退いて居れ、是徳兵衛殿、きよろりと見て居て誰に遠慮、エ、齒痒ひ、叩き出してくれん」と、初押取振上ぐればひらりと外し引つ手繰り、此初で我御料を撲つ」とはたくと打附くる、徳兵衛飛掛り初もぎ取、續け打に七ツハッ息もさせず撲ち据ゑ、はつたと睨む目に涙、ヤイ木で造り、土を捏ねた人形でも、魂入れば性根が有、耳あらば能ふ聞け、此徳兵衛は親ながら主筋と思ひ、手向せず存分に踏まれた、腹を借つた生みの母に今の態、脇から見る目も物體なふて身が顛ふ、今撲つたも徳兵衛は撲たぬ、先徳兵衛殿冥途より、手を出してお打なさるゝと知らぬかやい、おかちに入婿取といふは跡形もない事、エ、無念な、妹に名跡繼がせては口惜しと恥入り、根性も直るかと思案しての

その金を消費するの意。

○おのれ 「おのれ忘れはせぬまごの、おのれ」と同じ用ひで、代名詞から轉じた間投詞。

○間中 半間。二間間中は一問や半間の意。

○獄門柱の主 さらしくび(鼻哥)にあふ事をかくだうた。この詞戯をなして、與兵衛の最期は千日刑場の霧と消えるのである。

○叫び入り 叫んで泣き入り。

○もどかしい じれつたい。はがゆい。

○石に謎かける 感應せざる聲の謎。

○うじくひろぐ ぐづぐづする。遠慮躊躇する。

○町中 治安維持の方法として設けられた町年寄五人組をさす。勸當するには五人組に届けて立會つてもらふ。五人組は其の者を人別帳から除き、勸當帳に附けるのである。「日本水代蔵」卷二、才覺を笠に著る大黒の條に、「町衆に袴きせて舊里を切て子をひきり捨ける」。

○怪顛瀛 驚きあきれた顛瀛。

○きりく てきほき。さつさど。

○こすり出す 力を入れて引きずり出す。

○涙川 涙に涙川をいひかけた。「涙川は歌の語であつて、この名の川があるのではない。「伊勢物語」の歌に「いづこまで送りはしつと人間は、飽かぬ別れの涙川まで」。

◇與兵衛が低能兒である事は言ふまでもないが、それを驕兒にしてしまつたのは、繼父のかういふ心が餘程助けてゐる。

女殺油地獄

方便、あの子は餘所へ嫁入さする氣遣すな、他人同士親子となるはよく、他生の重縁と、可愛さは實子一倍、疱瘡した時日親様へ願かけ、代々の念佛捨て、百日法華になる是程萬面倒見て、大きな家の主にもと、丁稚も使はず肩に棒稼ぐ程遣ひほつく、おのれ今の若盛り、一働き稼ぎ五間口七間口の門柱の、主にと念願を立てこそ商人なれ、たつた一間間中の門柱に念懸け、母に手向ひ父を踏み行先偽り騙り事、其根性が續いたら門柱は思ひも寄らず、獄門柱の主にならふ、親は是が悲しい」とわつと叫び、入れば、エ、もどかしい徳兵衛殿、石に謎かける様に口で言ふて聞奴か、出て失せ、うぢくひろがば町中寄せて追出すと、又押取て母が突張る杓の先、怖い目知らぬ無法者、町中といふにぎよつとして胸衝きたる怪顛瀛、なふ兄様出して私は跡に残らぬ」と、縋る妹を押止め、きりきり失せう、杓が食らい足らぬかと、振上こすり出されて、越ゆる敷居の細溝も、親子別れの涙川、徳兵衛つくくと後姿を見送りて、わつと叫び聲を上、彼奴が顔附・背恰好成人するに従ひ、死なれた檀那に生寫し、あれあの辻に立たる形を見るに附、與兵衛めは追出さず、檀那を追出す心がして、物體ない、悲しいわ

○たしなむ涙 慎んで出さぬやうにしてゐる涙。
 ○繪幟 五月五日(端午)の節供に立てる鱈廬大臣
 なごを煮ける幟。そして男の子の爲に立てて祝ふの
 である。現今都會では屋上に懸るやうな大きな五月
 幟は殆んど見られなくなつて、多くは室内に小さく
 飾り立てるものが好まれるやうになつた。

いの「とどうと伏し人目も、恥ず泣聲に、憎い」も母の親たしなむ涙堪へかね、
 見ぬ顔ながら伸上がり、見れども餘所の繪幟に影も、隠れて
 ○隠れて 隠れて失せにけりしさいふまきぞ、三重である
 が故に略した。

下之卷 (豊島屋の宅。料理茶屋花屋)

登場人物の主な者

- 豊島屋七左衛門(本天満町の油商) お
- お吉(七左衛門の妻) お吉の長女(九歳)
- お清(お吉の次女。六歳) お
- 傳(お吉の末女。二歳) 河内屋與兵衛(お澤の次男)
- 綿屋小兵衛(上町の口入業) 徳兵衛(本天満町油商河内屋の主人與兵衛の繼父) お
- 山本森右衛門(武士。與兵衛の伯父) 刷毛の彌五郎(與兵衛の遊び友達) 皆朱の善兵衛(與兵衛の遊び友達)
- 河内屋太兵衛(與兵衛の兄) 七左衛門の同行衆・捕吏數多

梗概

端午の節供の前夜、豊島屋七左衛門は掛賣の金を集めて歸つた。そして又も掛取に行かうとするので、妻お吉は淋しがつて止めたが、彼は之を意にも留めずに出た。

お吉は三人の女兒を蚊帳の内に寝させ、用心の爲に表口を締めて氣を配る。無頼漢の與兵衛は、短刀を懐にし油壺を提げて、豊島屋の戸口の隙から内を覗く。折から通りかかった綿屋小兵衛は、之を見て呼掛け、貸金の催促をする。與兵衛「借りた金は今夜中に返す」とて、小兵衛を去らせたが、さて返金する工面もならず當惑に暮れる。この時繼父の來るを見て姿を隠す。

徳兵衛夫婦は別々に豊島屋を訪うて、お吉に逢ひに來たが、計らずも落ち合ひ、互に與兵衛を放逐した苦悶を語り、驕兒に對する夫婦間の氣がねや、馬鹿な子はなほ可愛い親心の悲痛な情を述べて、錢八百と粽一把とを出し、涙にくれて口々に、「若し與兵衛が來ましたら之を與へて。どうぞ改心するやうに説諭して下され」と、頼んで去る。

其の後で與兵衛が入り來る。お吉乃ち與兵衛の兩親から頼まれた錢と粽とを與へ、親の慈悲心を説いて懇ろに教誡した。與兵衛「いかにも得心しました。私も只今の親の話を立聞きして泣きました。きつと改心致します。が肝心なお慈悲の錢が足りませぬ。何を隠しませう、前月二十日親仁の判を盗み、之を捺して綿屋小兵衛から新銀二百匁を借りました。若し今夜中に返さずに明日になれば、一貫匁にして返す契約、剩へ小兵衛から、親兄の居る兩町の年寄五人組へ訴へられますので、詮方なく自害しようと思ひ、刃物を持つて出ましたが、さて自害しても親に其の金の難儀をかけずには濟まず。今の親の慈悲を聞いては死ぬに死なれませぬ。お宅には賣溜や掛金の奇りもある筈。どうぞ僅か二百匁の銀、貸して下され。與兵衛の命を救つて下され」と、哀願したのは彼の心の底から出た沈痛な叫びであつた。お吉はけにもとは思へど、いつも與兵衛の偽りに慣れてゐるので、之も亦口先ばかりと思ひ直し、きつぱりと斷つた。

與兵衛は絶望憤怒の極、心は悪魔と變り、いつそお吉を殺して金を奪ひ、それで借金を拂へば親に難儀もかけず、この夜陰では殺し手も知れまいと、大それた決意に目もすわり、「然らばこの油壺に油を容れて下され」とて、お吉が油を量る後に附纏ひ、短刀の鞘を拂つて隙を窺ふ。お吉は與兵衛の只ならぬ様子を見て怖氣立ち、逃げようとするを躍りかかつて刺殺した。賣場の庭は油と鮮血が流れて悽慘を極めた（本曲の題名は）。與兵衛は己が犯した大罪に慄へながら、銀を奪つて逃走し、悪友と共に遊女

町を飲んで歩く。

山本森右衛門は、お吉殺しは油屋與兵衛であらうとの世評に心を痛め、彼を諭して遠國に遁れさすか、或は自害を勧めようとして、逃げ廻る與兵衛の跡を追うて遊女町を尋ね廻る。

豊島屋では同行衆が集り、お吉五七日遠夜の追善を營んで、追憶の涙に袖を濡す。折節鼠が居間の桁梁で暴れて反古の切れを落す。七左衛門之を拾つて見れば、五月三日野崎の勅定書で、正しく與兵衛の筆蹟である。さてはと驚き、先々月野崎觀音参りの時の事を思ひ出して之を語れば、一座の者ども「さては與兵衛がお吉様を殺したに極まつた。さあ殺し手は知れませんでした」と一決する。

與兵衛はお吉を殺した事を悟られまいとして、何くはぬ顔で入り來り悔みを述べる。一座の者は其の言葉に耳もかさず、總立ちとなつて與兵衛を捉へようとする。與兵衛は死物狂ひとなつて、取附く者を突飛ばし蹴飛ばし門口に逃げ出る。

森右衛門・太兵衛は捕吏と共に、豊島屋の門口に佇んで内の様子を窺ひ、與兵衛の逃げ出るを取押へ、直ちに證據調をする。與兵衛大音上げ、大罪を懺悔して念佛を唱へ、遂に千日刑場の露と消える。

評

驕兒に對する親の悲痛な表情を披瀝し、優しくて堅實なお吉の性行を説き、驕兒が殺人の大罪を犯すに至る徑路を述べて、鮮かな個性の描寫に靈腕の沍えを見せた。殊にお吉殺しの場は、悪人の機微な心情を穿つて鬼氣人に逼る。殺人後の與兵衛は、犯罪者の通有性を遺憾なく發揮した。彼が捕縛されて懺悔するあたりは、其の末路に哀れを催させる。そしてこれ等善人も悪人も共に、廣大慈悲の佛の手に救はれる。巢林子の人生觀は、清濁併せ呑んで和かに、心胸の輝きを見せてゐる。

○蓬。菖蒲。端午の節供には、蓬十菖蒲を庇に葺いたものである。これは年中の邪氣を拂ふといふによる。

○掛。掛賣の金を集めること。即ち掛取の意。

○一卷。一狐松銘。一切。近松作「心中刃は水の朝日に」平野屋こかん、まきは語るも聞くもあはれなり。

○内の仕舞。明日は端午の節供であるから、家の内の取かたづけをしたのである。

○打つたり舞うたり。ひとりで鼓も打つたり、舞も舞うたりする義。一人で色々の働きをするをいふ。

○解櫛。頭髮を解くに用ひる齒の櫛(まほらしな櫛)。

○梅花の油。女が頭髮に塗る香油の名(既出)。

○梳櫛。頭髮を梳(す)きて垢を取るに用ひる齒の密な櫛。

○里。親里。

○鏡の家。鏡匣をいふ。鏡は女の魂で、鏡匣は女の魂のある家である。其の鏡の家がある以外には、女にまつて家といふ物はないとの意。

○家といふ物なけれども「毛吹草」に「女に家なし」。

○五月五日の一夜さを女の家といふ。端午は男子の節供で、この日、男は祝日の挨拶に廻り、遊興に日を暮し、女は留守居する場合が多いから斯くいふ。

○ゆづの爪櫛。髪引結(ゆづ)に「ゆづの爪櫛」を

下之卷

昔き慣れし、年も庇の、蓬・菖蒲は家毎に、幟の音のざはめくは男子持の印かや、娘ばかりの豊島屋は亭主は外の掛一卷、内の仕舞と小拂と油賣つたり舞ふたりに、三人の娘の世話、まあ姉からと櫛篋取出し解櫛に、色香揉込梅花の油、女は髪より形より、心の垢を梳櫛や、嫁入先は、夫の家・里の住家も親の家、鏡の家の家ならで家と、いふ物なけれ共、誰が世に許し定げん、五月五日の一夜さを女の家といふぞかし、身の祝ひ月祝ひ日に何事なけれ、撫で附て、髪引ゆづの爪櫛の齒の「ハア悲し、一枚折れた」、呆れてとんと投櫛は、別れの櫛とて忌む事と、口には言はず氣にかゝる何ぞの告げの小櫛かや、掛も十に七左衛門大方寄つて中戻りニア、思ひの外早い仕舞ひ、内の拂もさらりと仕舞ひ、兩替町の錢屋か

いひかけた。「ゆづ」は五百箇「はつ」の齒。齒の多きをいふ。

○爪櫛は齒の間のつまり追つた櫛。

○投櫛。櫛の齒の折れるを忌む。又櫛を投けるは別れの櫛にて古來忌んだものである。

○何ぞの告げ。何ぞ不吉のしらせ。何か不吉の前兆。

○十に七左衛門。掛櫛も十中七まで取立てたといふに名を

いひかく。

○ア、思ひの外に禮に出さしやんせ。お吉の詞。七左衛門を再び出さすまいとするは、我が身に迫る災難を、それとも知らずに夫を慕ふ齒の知らせである。

○兩替町。大阪市東區にある町名。

ら燈油二升梅花一合、今橋の紙屋から通ひ持て燈油一升、當座帳に附て置、まあ

イカ巻

池田町は北の端、近所の掛さへ寄つたらば過ての事、「こな人何言やる、節季に寄らぬ銀の過て寄つた例はない、今日暮れてから渡さふと詞つがふた、つい一走行て来ふ、此打違に新銀五百八十目、財布の錢も戸棚へ入て錠おろしや、やがて歸ろ」と立出る「申々、そんなら酒一ッ姉、それ爛して進じゃ」と、立て戸棚へ徳利からちろりへ移せば、「アこりや、爛せいでも大事な、肴も杯も入らぬ、中蓋添へて持て来い、

○今橋 大阪市東區にある。

○通ひ 通帳(かよひちやう)。

○禮 端午(五月五日)の節供の禮廻り。

○天滿の池田町 大阪市北區天滿池田町。

○きやうとい けうとい(氣疎い)の訛。人氣「ひまじ」疎く物淋しく氣味悪い意。

○過ぎての事 節季(端午)過ぎての後日の事にしたがよい。

○うちがひ 金鎖を入れる胴巻の囊。これを「うちがひ」といふは打違ひに帯びるよりの名である。但し夏山雜談には「打銅」といふものは狩の時犬の食物を入れて、犬寒の腰につくる袋なり、飢ゑたる犬に手して食物を與ふれば手にくひつくもの也、是を地に打つれば食物の出るやうにしたるもの也、今商家に鎖などを入れて腰につくる袋をうちがひといふは、犬の打銅に似たる故也」とある。

○新銀五百八十目 新銀即ち享保銀五十匁七分に享保金一兩(二十匁)相替り替して、五百八十目は二百二十八匁八十錢に當る。

○やがて 直(ぢき)の間(ま)に。すぐに。

○ちろり 筒形で、注口及び提梁(つら)があつて、酒を容れて暖める金屬製の具。

○中蓋 中位な大ききの椀の蓋。

○とど 「こままる」或は「こまる」の首音を譲らせた小兒語。坐止。九歳の長女が、坐つてゐては手も届かぬので立ちあがつたのである。

「アこりや、爛せいでも大事な、肴も杯も入らぬ、中蓋添へて持て来い、

○立酒 送勢の時立ちながら酒を飲む風習がある。この文は、それで送勢を睡観して立酒を思ふたのである。

○野送り 野邊に送葬するをいふ。

○取直し 詞を取直し。

○此の世に残らぬ 此の世に思ひ残すことなく満足の至りに祝うたのである。但しこの詞は、存命せぬ意にも取れるから、「哀れ世の長き別れ」を言いたのである。

○祝ふ程 掛の取立がはかどり行く立酒と祝ひ、此の世に残らぬと祝うた詞は、墓行の立酒と取られ、存命せぬ意にもなり、詞を取直して祝ふ程不吉の詞となる。

○御座 寢座ねざ、ねござ。「御座よ」短夜みやは、當時の流行唄に據つたのであらう。

○ろく 平安の意。圓を「まろく」といひ、陸地を「ろく」といふ「ろく」もこれである。

○廣袖 袖口の下方を縫合はせぬ袖。これに心の廣いをはかす。昔まはらぬ貧乏でも、心は廣くの意をいひかけたのである。

○鐙の詰り 刀の鞘の末端を錆といひ、金屬などで飾つてある。物事の抜き差しならぬを鐙が詰るといふ。金に算してどうにもならぬ意に、脇差の縁語を用ひてかくいうた。

○上町 大阪市東區石町あたり。

○口入 金銭など貸借人の間に立つて世話する者。周旋人。

女殺油地獄

夜が短い氣が急ぐ其處から注げ、「あい」とは言へどしては手も届かねば立上り、注ぐも受くるも立酒をお吉見附て「そりや何ぞ、忌々しい子供は頭是が無いにもせい、立酒飲んで誰を野送り、ア氣味悪」と、言はれて夫もちやつと腰掛け取直し、「懸乞に行門出に抄行の立酒、此世に残らぬ」と、祝ふ程猶哀れ世の長き別れと出て行、母を見習ふ、姉娘、夜の衾を敷き、に、「御座よ枕よ蚊帳の釣手は、長けれど届かぬ足の短夜や」、おでんをろくに寝させて、「母様もちとお休み」と言ひければ、「ヲ、出来しやつた父様もまだ遅かる、蚊帳の内から表は母が氣を附る、汝が身も寝々しや」「いゝゝ私は眠たうござらぬ」と、言ひつゝ眠るもおとなしし、此節季越すに越されぬ河内屋與兵衛、手筈の合ぬ古袴、心ばかりが廣袖に提げたる油の二升入、一生差さぬ脇差も今宵鐙の詰りの分別、勝手知つたる豊島屋の、門の口覗く後より、「與兵衛殿じやないか」「ヲ與兵衛じやが誰じや」と振返れば、上町の口入綿屋小兵衛、「アこなたは順慶町へ行けば、本天満町親御の所へと言はる、親御へ行けば追出した爰には居ぬと有、貴様は留守

○こなたは お前さんは何處に居るのか、探すて困つた。

○順慶町 與兵衛の兄河内屋太兵衛の住める町。

○新銀一貫目 享保金一兩二十圓相場に新銀(即ち享保銀)五十匁七分替として、新銀一貫目は三百九十四圓餘に當る。

○町へ斷る 町年寄五人組に願ひ出る。

○意氣方 氣まへ。(既出)。「意氣方の懸いと」は野暮なの意。

○二百匁 享保金一兩二十圓相場に新銀五十匁七分替として、新銀二百匁は七十九圓餘に當る。

○明六つ 午前六時。

○非業 業因にあらざるをいふ。親仁が運費した金でないからかくいふ。

○せうし 氣の毒。いたはしいこと。「せうし」は笑止と書けど、もど「しやうし」(勝事)であつて、すなれたことの意味から、かはつたことか、いたはしことこの意に轉じた語であらう。

○見届けた 見届けたからは貸すわいの。

○首締める綿屋 既に「真綿で首締める」。

○南無三寶 (既出)

○平蜘蛛の ひらたぐもの如く。「平蜘蛛のひつたり」は、同じ頭音によつた所謂頭韻法。

○つつと 唐突の意。つゝつゝつゝ。

でも判は親仁の判、新銀壹貫目今宵延びると明日町へ斷る、「ハハア爰な人は意氣方の悪い、手形の表こそ壹貫匁正味貳百匁、今宵中に済ませば別條ない約束では無いかいの」、「されば明日の明六迄に済めば貳百匁、五日の日がによつと出ると壹貫匁、もと貳百匁を壹貫匁にして取れば、此方の徳の様なれど、親仁殿に非業の銀を出さするが笑止さに、こなた最負で責附くぞや、今宵きつと済ましや〜」、「小兵衛こりや念入るゝな、河内屋與兵衛男じや〜當が有、庭鳥の鳴く迄には持て行く、眠たくと待て貫を」、「はて今宵済まして入用なれば、明日又直に貸すはいの、此方も商賣壹貫匁や貳貫匁は何時でも、其男氣を見届けた」と、詞で與兵衛が首締める綿屋小兵衛は歸りける、與兵衛見事に請合は請合しが、一錢の當もなし茶屋の拂は一寸遁れ、拔差ならぬ此二百匁、有所には有ふがな、世界は廣し貳百匁などは、誰ぞ落しそふな物じやと、後を見れば小提灯、河といふ小文字はこつちの親仁南無三寶と、鎖いたる店に平蜘蛛のひつたり身を附身を忍ぶ、徳兵衛は氣も附ず豊島屋の潜戸そつと明、「七左衛門殿お仕舞か」とつゝと入れは「是は〜徳兵衛様、こちのはまだ仕舞はず、天滿の端迄行かれます、私は取紛れお

○際 端午の節供際。

○謀判 偽判にせはん。

○首綱かかる 捕縄を輪にして首に懸け、兩手を背後に廻して手頸を括つた其の繩を、首輪に懸けて縛り上げるからいふ。近松作「實古教信七巻四夏野のまよひ子(四段目)に「御身の上にも首綱のかかる苦患の身になれど」。「義經千本櫻」第三、椎の木の際に「僅か二十兩で首綱のからぬ内、四の五の言はずに出したく」。この文に「一貫匁の銀に十貫匁の手形して」といへるは、よく與兵衛の事を察知してゐた。其の銀高こそ違へ、與兵衛は實に二百目の銀を借りるに、一貫匁の手形に親の判を盗んで捺し、之が爲に遂に殺人の大罪を犯して、首綱懸かる身となるのである。

○輕薄 おせじ。

○父親は合點 父親徳兵衛は、與兵衛の勸告を赦して内へ戻すことを納得してゐる。

○ど性骨 「し」は罵る時に添はる接頭語。根性魂。

見舞も申さぬに、能ふこそ能ふこそ、此際は與兵衛様の事に附、いかひお世話でござんしよ」と、蚊帳より出れば「されば、こなたは幼い娘御達の世話、我らは成人の與兵衛に世話をや、いづれの道にも子に世話病むは親の役、苦勞共存せね共、引附て一處に有中は氣も落附、あの様な無法者を勸當すれば、自暴を起し明日火に入も構はず、謀判似せ判壹貫匁の銀に十貫匁の手形して、一生の首綱かゝる例も有事と思ひながら、産みの母の追出すを、繼父の我ら輕薄らしう止められず、聞ば順慶町兄が方に居るとやら、若し此邊へ狼狽へて見へましたら、七左衛門殿御夫婦言ひ合せ、父親は合點、随分母に詫言致しど性骨入替へ、二度内へ戻る様に御意見偏に頼み入、こちの女房お澤が一家一門皆侍、その習はしか思ひ切ては見返らず、義理堅ひ生れ附それに似ぬ道樂者、本親の檀那も行儀強く、義理も情も知つたる人、二人の子供に心を盡すは皆故檀那への奉公、今與兵衛めを追出し、一生荒ひ詞も聞ぬ親方に、草葉の蔭より恨を受くる、無果報は此徳兵衛一人、推量なされお吉様」と、煙草に涙紛らして咽返る、こそ道理なれ、
「ムウ、思ひ遣りました、此方のも追附歸られう、逢ふてお話なされませ」

○紙子著て川へ陥る 無謀自滅に喩へる語。紙子は紙で作つた衣服であつて、元祿頃にはなほ用ひたもので、仙臺紙子などは佳品であつた。

○三昧 存分。専心の義より轉じて、勝手放題の意にいふ。

○死光 死にはえ。死後の光榮。

○釋迦擔 佛を擔ふこと。義。死人を納めた棺を後向きに背負ふこと。何處の者とも知れぬ行倒れ人のある時は、検屍の後、非人が其の死體を棺に納め、後向きに背負うて埋葬地に運んだものである。

○粽 端午の節供だから、母は我が子與兵衛に粽をやらうとしたのである。母が子を思ふ情をよく寫してある。

○談義 對談法稱。佛敎の法話。

○周利槃特 佛弟子中で第一の魯鈍者であつたといふ。後に大悟して阿羅漢果を成じた。

○阿闍世太子 摩竭陀國王の太子で、父王を弑し、母后兼提希夫人を擁明した大惡人。

ぬが三昧、惡人めに氣を奪はれ、女房や娘は何になれ、サア〜先へ往なしやれしと、引立る袖を振放し、「エ嗚慘いぞやさうでない、生れ立から親はない、子が年寄つては親となる、親の初は皆人の子、子は親の慈悲で立親は我子の孝で立、此徳兵衛は果報少く今生で人は使はずとも、何時でも相果てし時の葬禮には、他人の野送り百人より、兄弟の男子に先興、跡興昇かれて、天晴れ死光やらふと思ふたに、子は有ながら其甲斐なく無縁の手にかゝらふより、いつそ行倒れの釋迦擔ひが、ましておじやるは」と又咽、返るぞ哀れなる「ア與兵衛めばかりが子ではない、兄の太兵衛娘なれどもおかは此方の子でないか、サア〜早ふ先へ」と押出す、「ハテ去ぬるなら連れ立ふ其方もおじや」と引立る、母の袷の懷より、板間へくはらりと落たは何ぞ、粽一把に錢五百、「なふ情なや恥かし」と我身を掩ひ押隠し聲を上、「徳兵衛殿眞平赦して下され、是は内の懸の寄り與兵衛めに遣りたればかり、私が五百盗んだ、二十年添ふ中隔心隔ての有やうに情ない、たとへあの惡人めお談義に聞様な、地しゆりはんどく、周利槃特の痴人でも阿闍世太子の鬼子でも、母の身で何の憎からふ、如何なる惡業惡縁が胎内に宿つてあの通りと思へば、不便さ可愛

○隔てた心 子に對する實母の情愛と、繼父の義理愛と、互に隔てた心。

○あいたてない 「あひたてないであつて、間隔のない義理の分別がない。溺愛して無分別なるをいふ。

○勾張こうぢやう 家など支へ張る材をいひ、轉じて剛愎の意にいか。この文意は、母親が盲目愛であるを、子はよい事にして益々剛愎になるをいふ。

○けんけん (既出)

○慳貪けんこん 邪險、無慈悲。

○立派好きもする奴 立派な風をしてしやれたがりの奴。

○祝ひ月 正・五・九月をいふ。こはその五月端午の節供に當る。

○此の月ばかり 追放したによつて後叙あいつが、此の月ばかり祝儀缺かす。

○與兵衛が偽能兒である事は言ふまでもないが、それを世間知らずの婦兒にしてしまつたのは、母のかういふ心が餘程影響してゐる。

○文字ひらなな 「文字片半」であつて、一錢半錢の義。「もじ」は錢をいふ。「物類稱呼」に「ぜに(錢)」「袋内」に「表の方をもじ」と云。片「ひら」は一片即ち一錢。半「なか」は半錢。

○子故の闇に迷はされ 「後撰集」卷十五、兼稱朝臣の歌に「人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ道にまどひぬるかなし」。

○心もない 祝ひ日であるから、目出度う笑ひ

さは父親の一倍なれ共、母が可愛ひ顔しては隔てた心に、あんまり母があいたてない勾張が強ふて、いよゝ心が直らぬとさぞ憎まるゝは必定と、わざと憎ひ顔して撲つ、叩いつ追出すの勘當のと、惨ふ辛ふあたりしは繼父の此方に、可愛がつて貰ひたさ、是も女の廻り智恵赦して下され徳兵衛殿、私に隠してあの錢を遣つて下さる志、詞ではけんゝと慳貪に言ふたれど、心で三度戴きし、何を隠そふ彼奴は立派好きもする奴、取分け祝ひ月髪附・元結を調べ、人交りもしたからふ、生れて此方節供ゝ祝儀缺かさぬに此月ばかり、身祝ひもして遣りたさ、見苦しい此恥辱を曝すも、お吉様頼んで届けん爲、まだ此上に根性の直る藥には、母が生肝を煎じて飲ませといふ醫者あらば、身を八ツ裂も厭はね共、一生夫の錢金文字ひらなな違へぬ身が、子故の闇に迷はされ盗みして露れた、恥かしゆござる」とばかりにてわつと叫び入れれば、「道理ゝ」と夫の嘆き子を持者は身に應へ、行末思ふお吉の涙折からに鳴く蚊の聲もいと涙を添へにけり、「や祝ひ日にも心もない泣き喚き無調法、其錢もお吉様頼み、與兵衛に遣つてお暇申しや」と、言へ共女房涙にくれ、こな様の遣つて下さる其深ひ志に、盗んだ錢が何と遣ら

祝ふべきに、その心違ひもなく憚らないで。

○わしか 「わしがしあるべき所。」

○とてもの 一つその。

○二親の心隔てぬ：樞開けて 隔心なき二親も、不孝な子の爲に隔心がましうなつて、互に包み隠し合つたを互に打明けた事を、樞の落ちたり開けたりするにいひかけてかくうた。

○心一ツ 二親の慈愍心を離れて、この上親を苦しめられず。お吉から銀を何でも積りよと云い、心一途に決意したるをいふ。

○餘所の方から 我が身の事は言はず餘所の方から。

○うちら問ふ 心の中を問ふ。「うちらは心の義。『樞調架』に「心をさしてうらこい詞多し、詩に不離于寒」云々、ロニシ見えたり云々。」

○際 節季。ここは端午の節供(節日)をさす。

○まん 問(まじ)んの添加した語。調子。運。

○合力 力を合はせて助ける義。助力。施助。

○お二人の葬禮：柩でもない 前文徳兵衛の詞に「相果てし時の葬禮には、他人の野添り百人より兄弟の男子に先典跡與昇かれて云々」と、あるを受けてかくいふ。お二人とは與兵衛の兩親をさす。

りよ、「ハテ大事な平に遣りや」、「いや許して下され」と、女夫が義理の遣る

方なさお吉も、涙止めかね、「ア、お澤様の心推量した遣りにくい筈、爰に棄て、

置かしやんせ、私が誰ぞよさそな人に拾はせましょ」、「ア、忝いとものお情、

此棕も誰ぞよさそな犬に、食はせて下さんせ」と、又泣き出す二親の、心隔てぬ

潜戸も子の不孝より落ちたる樞開けて夫婦は歸りけり、父母の歸るを見て心一ツ

に打領き、脇差抜いて懐に鎖いたる潜戸さらりと開け、つと入より胸も樞も

落し附、七左衛門殿は何方へ定て掛も寄ましょ」と、餘所の方からうちら問ひける、

「誰かところ思ふたれ與兵衛様か、こな様は仕合な、後ともいはず好い所へござ

んした、是此錢八百此棕こな様へ遣れと天道から降りました、戴かしやんせ、な

んば浪人でも際の日の寶、まんが直ろ」と差出せば、與兵衛ちつ共驚かず、「是が

親達の合力か」、「ハテ早合點な追出した親達が、何のこな様へ錢金を遣らしやん

しよ」、「いや隠さしやるな、先刻にから門口に蚊に食はれ、長々しい親達の愁歎

聞て、涙をこぼしました」、「ム、そんなら皆聞てか能ふ合點参りしか、他人でさ

へ目を泣腫した、此錢一文も徒にはなるまい、肌身に附て一稼お二人の葬禮に、

○男でも机でもない 人間の資格無しのに意に
いふ語。狂言に「人か机か」といふがある。

○逆罰 神は人を加護するものであるのに、それが
逆に罰する事を逆罰といふ。罰を強めた語。

○お慈悲の錢が足らぬ 新銀五十匁七分に
錢四貫文替として、與兵衛が綿屋小兵衛から借りた
新銀二百匁は錢十五匁七百七十九文に當る。之を拂
ふに親の慈悲の錢八百ではとても足らぬ。

○新 新銀即ち享保銀貨。

○許りる 許される。

○奥を聞かうより口開け 人の心の奥を聞
かうとするよりも、口に語るを聞けば真相がわかる
この意の語。

○悪性所 遊罵。

○上銀 新銀(享保銀)は良質なれば上銀といふ。
前文に「新銀五百八十匁、財布の錢も戸棚へ入れて
錠おろしや」とある。

○きるもの(著物) 昔は土方では「きるもの」と
いはず。

○不義 差遣の意。

立派な乗物に乗せうといふ氣がなければ、男でも机でもない、それを御背きなされたら天道の罰佛の罰、日本の神々の逆罰が當つて、將來が善ふ有まい、先戴いで「と差出せば、如何にも」能ふ合點しました、只今より眞人間になつて孝行盡す合點なれ共、肝心お慈悲の錢が足らぬ、と云ふて親兄には言はれぬ首尾、爰には賣溜め掛の寄り銀も有筈、新でたつた貳百匁ばかり、勘當の許りる迄貸して下され、「それ」奥を聞ふより口聞何處に心が直つた、嘘にも銀貸してくれとは言はれぬ義理、世間の義理を缺いても、銀借つて悪性所の拂して、跡から段々行こふでな、成程銀は奥の戸棚に上銀が五百匁餘り、錢も有は有ながら、夫留守に一錢でも貸す事はいかな、何日ぞやの野崎参り著物洗ふて進せたと、不義したと疑はれ、言譯に幾日か、つたやらなふ疎ましや、歸られぬ内其錢持て早う去んで下さんせ」と、言ふ程側へ蹠り寄、「不義に成つて貸して下され」、「ハテ成らぬと言ふにくどい」、「くど言ふまい貸して下され」、「イヤ女子と思ふて黴らしやると聲立て、喚くぞや」、「ハテ與兵衛も男、二人の親の詞が心根に染込んで悲しいもの、黴るの侮るのといふ所へ行く事か、何を隠しませう

○跡の月 前月。

○謀判 (既出)

○年寄 町年寄のこと。町年寄は町内の公用雑事を掌る役で、町内の町人中で徳望あり資産ある舊家の者を公選し、任期多くは三年で名譽職である。

○五人組 治安維持の方法として五人組合團結の制を定め、組合相警めて罪惡を犯さないやうにし、若し罪惡を犯す者あれば、其の組合から之を告發せしめた。

○才覺 工面(くめん)算段。

○まがくしい 「まがくしい」の誤用であつて、「まごころしい」の意に用いたのである。當時は「まがくしい」「まざくしい」「まを混同して用ひたものである。

○尾鱸(おぼろ)附ける 實際よりも仰山にいふ意の諷。

○冥利(みやうり)かけ 神佛が人知れず冥々の中に降し給ふ利益(みやうり)やくしを贈して、自誓の詞に「何冥利」などいふ。

○一分別(いっぶんべつ) かうなつては瀕(ひん)死(し)絶命(ぜつめい)、非常手段に及ぶより外に仕方がない。幸ひに夜陰で誰も見て居ぬから、お吉を殺して金を奪ひ、その金で借金を拂へば繼父に難儀もかけず、殺し手も知れなく、一分別したのである。恐怖すべき大罪は實にかういふ場合に起るのが多い。某林子の筆之を穿つて辛辣を極めた。

跡の月の二十日に、親仁の謀判して上銀貳百匁、今晚切に借りました、ヤまあ跡を聞て下され、手形の面は上銀壹匁、借つた銀は貳百匁、明日になれば手形の通壹匁で返す約束、それよりも悲しいは親兄の所は言ふに及ばず、兩町の年寄五人組へ先様から斷る筈、今になつて此銀の才覺、泣いても笑ふても叶はぬこと、自害して死ふと覺悟し、是懷に此脇差差しは差いて出たれ共、只今兩親の嘆き御不便がりを聞ては、死んで此銀親仁の難儀にかくる事、不孝の塗上身上の破滅、思ひ廻せば死るにも死なれず、生きては居られず詮方なさに見かけての御無心ぞや、無ければ是非もなし有銀、たつた貳百匁で與兵衛が命を繼いで下さる、御恩徳、冥土の底迄忘れうかお吉様、どぶぞ貸して下され」と言ふ目の色も誠らしく、そうした事もと思ひながらかねての偽りも亦、其手よと思ひ返して、フウ、まがくしいあの嘘はいの、また尾鱸附て言はしやんせ、成らぬと言ふてはきつう成らぬ、是程男の冥利(みやうり)にかけ、誓言立て、も成ませぬか、ハアは何とせう借りますまい」と言ふより心の一分別、そんなら此樽に油二升取替へて下さりませ、それは互の商ひ内貸し借りせいで世が立たぬ、成程詰めてと賣場にかかり、

○邪險じあけん 邪見じあけんも書く。無慈悲。憐あはれむこく險懸けんけんなり。

○此方こなたの人とも割入わりいつて相談 夫七左衛門殿むせだんも丁寧に相談されたがよい。「割入わりいつて」は折入せりいつての意。

○ばし 語勢を強める接尾語。謡曲などにその用例が多い。伊勢あたりの人は今も往々用ひてゐる。

○出合であひへ 「誰か来てくれ」とお吉が喚く。
○音骨ねほね 音聲。音ねは語意を強めるに添へた接尾語で、息いき「いき」の語を強めて息骨いきほね「いきほね」といふ。

○鏈くさり 咽喉は九節くさねつながらによつていふ。「和漢三才圖會」卷十二、支體部に咽喉、有あ九節くさね。
○煽あおぎ 煽風。吹巻くる風。

○身内みうち 全身。
○劍けんの山 劔林けんりん地獄。

○油あぶらの地獄 焦熱地獄。本曲の題名はこれから出てゐる。

○軒のきの菖蒲あやむぎの病は避くれども 端午の節供せちまひに軒のきに菖蒲あやむぎを葺くは、菖蒲あやむぎは悪氣を除くといふによる。その通り如何にも千々の病は、悪氣を除きて避くれども。

○業病ごふびょう 前世の業因ごふいんによる病。「千々の病」を受けて業病ごふびょうといひ、前世の業因ごふいんによる災難の意。

○菖蒲刀あやむぎたな 端午の節供に柳橋を以て刀の形を作り、これに箔を塗つたもの。與兵衛の邪険の刃をきかせた。

消ゆる命の燈火は油量るも夢の間と、知らで升取柄杓取、後に與兵衛が邪険の刃抜いて待て共見す知らず、祝ふて節供もお仕舞なされ、此方の人共割り入て相談、有銀なれば役に立まい物でなし、五十年六十年の女夫の中も、任意ならぬは女の習ひ、必ず私を恨んで下さるな」と言ふ内に、灯に映る刃の光お吉びつくり、「今のは何ぞ與兵衛様」、「イヤ何でもござらぬ」と脇差後に押隠す、それ〜きつと目も据はつて、なふ恐しい顔色、其右の手爰へ出さしやんせ、おつと脇差持替へて「是見さしやれ、何も無い〜」と言へ共お吉身もわな〜、ア、こな様は小氣味の悪い、必ず側へ寄るまい」と、跡退りして寄門の口、明て逃んと氣を配れど、ハテきよろ〜何恐しい」と、附廻し〜「出合へ」と喚く一聲、二聲待ず飛掛り取て引締め、音骨立るな女め」と、吭の鏈をぐつと刺す刺されて惱亂手足をまがき、そんなら聲立まい、今死んでは年端も行かぬ三人の子が流浪する、それが可愛ひ死に共ない、銀も入程持つてござれ、助けて下され與兵衛様、「ヲ死に共ない筈尤々、こなたの娘が可愛ひ程、おれもおれを可愛ひがる親仁がいとしい、銀拂ふて男立てねばならぬ、諦めて死んで下され、口で申せば人が聞、

○日比の強き死顔 上巻にお吉を評して、「美し顔で扱々堅い女房」、「所帯じうて氣がこうじう好い女房」とある。

○鳴神 雷（かみなり）。

○打造（脱出）

○上銀（脱出）

○薄水を履む 心に危懼をいづくに喩ふ。「諸經小経に靴々靴々如塵（深淵）、如履（薄氷）」。

○火焰踏む 油の地獄に應じる。

○梅檀の木の橋 大阪市東區北澤三丁目から北區中之島二丁目に架す。難波橋と淀屋橋との間にある。

○足に任せて 「足に任せて逃げにけり」といふべきを、三重であるが爲に略した。

○おしてるや 「おそひたる（竝立）や」の約。波の難ひ立てることで、難波の枕詞。

○水無月 早して田の面に水の無くなる月の義。陰曆六月の稱。

○夏神樂 六月十七日御靈夏神樂。同二十一日傳町稻荷夏神樂。

○麻四筋 大阪新町遊廓をさす。新町遊廓は、阿波座、祇賀町、佐渡島町、吉原町の大通りよりなる。

○花揃 解語の花揃。花のやうな美妓の揃ひ。

○よね 妓女をいふ。（貝索引）

○揚屋 置屋から遊女を招寄せて遊興する妓樓。

○三百六十日 貞享曆の一年は三百六十日。

心でお念佛南無阿彌陀、南無阿彌陀佛」と引寄せて右手より左手の太腹へ、刺いては抉り抜いては切、お吉を迎ひの冥途の夜風、はためく門の幟の音煩に賣場の火も消へて、庭も心も暗闇に打撒く油流るゝ血、踏みめらかし踏み滑り、身内は血汐の赤面赤鬼、邪険の角を振立て、お吉が身を割く劔の山目前油の地獄の苦しみ、軒の菖蒲のさしもげに、干々の病は避けられ共、過去の業病遁れ得ぬ、菖蒲刀に置露の魂も亂れて息絶へたり、日比の強き死顔見て、ぞつと我から心もおくれ、膝節がたたく胸を押下げ、下げたる鍵を押取て覗けば蚊帳の打解けて、寐たる子供の顔附さへ我を睨むと身も顫へば、連れてがらつく鍵の音頭の上に鳴神の、落かゝるかと肝に應へ、戸棚にひつたり引出す打違、上銀五百八十匁宵に聞たる心當、振込振込む懐の、重さよ足も重くれて、薄水を履む火焰踏む、此脇差は柵檀の木の橋から川へ、沈む來世は見へぬ沙汰、此世の果報の附時と内を抜け出一散に、足に任せてをしてるや、難波の春は、京に負け京は難波の景色より、劣る水無月夏神樂、廊四筋は四季共に散る事、知らぬ花揃、妓の風俗揚屋のかゝり富士も及ばぬ巒の山、第一日本の名所なり一年三百六十日、

◎紋日 物目ものびの稱。祝ひ日。この文意は、大阪遊廓の紋日は、一年に庚申日を除いても十三日あつて、一ヶ月平均約三日ある。「女教誨地獄」の上演された承保六年は七月に開があつて、開の紋日は略されるので、一ヶ月の平均数の三日少いことになつて、遊女屋の主人は其の脱儀を得られぬを嘆き、紋日の多い程喜ぶ。然し遊女は紋日の多い程程多くの入費の厄介を客にかけ、客は遊女に頼まれて應諾しながら、費用の高む爲に約束を變改に行く者もあるとの意。

◎くつわ 遊女屋の主人。

◎扇で忍ぶ茶屋の客 扇を扇で隠して色茶屋に来る遊客。

◎一座遊び 初めて登壇しての遊興。即ち新客である。「一座」を見よ。

◎女方 正しくは如法によほふである。柔和。初めて登壇した新客は、遠慮して柔和らしいとの意。

◎肩で風切る空ぞめき いかにも裕福らしく威勢よく見えても、其の實見かけばかりで金を持たぬ素見客のことをいふ。

◎位 遊女の位。即ち大夫、天神、鹿鹿、端女郎などない。遊女の位を問ふは、やほであつてそれは田舎客などの意。

◎太鼓 限りの太鼓で、廓の門限を報じるもの。

◎手揉め 自費で他人を養應すること。「廓の門限の時刻が過ぎてから、しつほり」といふは、遊女が手前振舞の情夫客との意。

◎親、親方の持つ客 親や親方が遊興費を負

担する客。

紋日もんじつが三日みつた足らぬとてくつわくつわは歎なげく、女郎ぢやうらうはそれ程客きやくに厄介やくかいを、變替へんかへに行客ゆくきやくも有、
 好このんで頼たのみ頼たのまる、客きやくは一際いちげん嚴げんげに、駕籠かごを飛ばとす揚屋客あげやきやく、扇あふぎで忍しのぶ茶屋ちややの
 客きやく、一座いざ遊びあそびは女め方かためく、肩かたで風切かぜき空からぞめき、位ゐを問とふは田舎客いなかきやく、寝ねて物語ものかたる馴な
 染客ぢみきやく、太鼓たいこ過すぎつと、囁ささくは女ぢやうらう郎らうの手揉てもめの振舞客ふるまひきやく、親おや、親方おやかたの持もつ客有きやくあり、我身わがしん上やう
 の滅却めつじやく有あり違格ちがひも交まじり行通ゆきかよふ、道の間ちのまを暫しばくも口くち只置ただおくは恥はらしく、役者物真似やくしやものまね・地
 の物真似ものまね・小歌こが・淨瑠璃じやうるり・口くちでんがう西口東口にしにし々に、行ゆくも歸かへるも障さはりなき夕ゆふべ夕ゆふ
 べの大寄おほよせは、豊ゆたかなる世よの功績いささなり、されば山本森右衛門やまもともりゑもん・與兵衛よへゑが身持みもちの知しら
 せに驚おどろき、暫しばく主人しゆじんに暇いとま乞こひ大坂おほさかへ立越たこへしが、女殺おんなころして銀取ぎんとりしも儘たかにそれと
 は知しれね共ども、十日じゆじつの視みる所ところ與兵衛よへゑに指ゆびさす身の放埒はうらち、若もしやと詮議せんぎも寄附よりつかねば
 先々さきさき尋たづね廊らうの内うち、東口あづまぐちにて尋たづねにそんじよそことは教おしへしかど、何いづれも同じ局おなの
 か、り、爰こゝ、備前屋びぜんや、是これや教おしへし備前屋びぜんやかと、見紛みまがいイいみ居ぬる折節せつせう、手てに嵩高かまたかな
 文持ふみもちて西かたの方かたから來きる禿かぶは、是これ々ごと物問ものとはふ、備前屋びぜんやと申傾城屋まきすけいせいのやは何方いづかた、其御内おんうちに松
 風殿かぜどのと申傾城まきすけいせい、御存おんぞんならば教おしへてたべ、我わがら當所あたふち不知案内あんない、頼入たのみとぞ堅苦かたくろし、
 「フウ仔細ふうさいらしい物の言いひ様やう、備前屋びぜんやは此家こゝ、西にしの端はしに戸かどの鎖さいた、客きやくの有局あつはねが

據せねばならぬ客。

○いきやく 遠裕(みきやく)に異客(「正しくはいかくをいひかく。」「本朝世談俗談」巻一に「國王ノ成敗、格ニ合ヘバ勲賞ヲ蒙リ、格ニ違ヘバ罰ケラル、ソレヲ違裕着(イキヤクモノ)ト云ナリ、俗ニ違裕ヲ離義スル事ヲ違裕スルト云ハ、コレヨリハジマル」ニある。異客とは他國の客をいふ。この文は、遊興に身をまわづして身代を滅却する客もあり、また金で工面が通つて離儀する客も交りの意に、旅の田舎客も交りの意をいひかけた。

○役者物真似 俳優の身振(みぶり)と聲色(こゑしき)をいづれを真似ること。○物真似(ものまね)を見よ。

○地の物真似 淨瑠璃などの語り物の地の文句を、名人の口吻に真似て歌ふこと。

○小歌 時代によつて其の意味が違つてゐる。昔(李保頃でも)は芝居で使はれる歌を多く小歌といふた。強ち歌の短いといふ意味ではない。そして小歌と書き、小唄とは書かなかつた。

○口でんがう 常談口。おどげ口。

○西口東口 西の大門口、東の大門口。

○遊女 遊女、遊客を數多寄せて一處に遊興すること。

○十目の視る所 「大學」に「十目所視、十手所指、其嚴乎」。

○詮議も寄附かねば 詮議しようにも與兵衛は家に寄りつかぬから。

○そんじよそこ 尊丈足下(そんぢやうそこ)。

女殺油地獄

松風様でござんす、コレお侍様、左の足上(あしうへ)さんせ、ソレ〜又右の足も上(あしうへ)さん

せ、ヲ、能(あた)ふ上(あ)さんした、いかい世話(せわ)の」と、翫(あそ)つてひんしやん行(い)過(す)る、所柄(ところがら)と

て人に馴(な)れ、エ氣(き)輕(かろ)い奴(やつ)と打笑(うちわら)ひ、教(おし)へし局(つばね)に立寄(た)れば、内(うち)に火影(ひかげ)は有(あ)りながら

戸口(とぐち)ひつしと立詰(たてまつ)めたり、扱(あ)こそ客(きゃく)は與兵衛(よへいゑ)に極(きま)る、出(で)るを捕(とら)へ逢(あ)はん物(もの)と、待(まつ)

間程(まはら)なく戸(と)を開(ひら)き、編笠(あみかさ)被(か)き立出(た)出る透(す)さすむすずと引(ひ)抱(いだ)かゆる、女郎(ぢやうら)も續(つづ)いて

「こりや誰(たれ)ぞ、率爾(そつじ)せまい」と引分(ひきわ)くる、苦(くる)しからず率爾(そつじ)でない、おのれ與兵衛(よへいゑ)

め隠(かく)れたらば逢(あ)ふまいか」と、笠引(かさひき)ちぎり顔見合(かほみあ)せ「ヤア、こりや與兵衛(よへいゑ)でない

人違(たが)へ、眞平(まっぴら)〜面目無(めんむ)や」と腰折(こしやつ)て手を擦(す)れば、彼奴(かやつ)も忍(しの)びの戀(こひ)やらん、領(うら)く

である。もこ五山僧(ごさんそう)が相對(たいがい)の人に用(もち)ひた敬稱(けいしょう)で、「三益(さんえき)醜詞(しうじ)」

などに見えてゐる。後に其の義(ぎ)を釋(は)して其處(こゝ)、「其邊(こゝ)の意(い)にいふ。

○局(つばね)のかけり 遊女の部屋(へや)の構(かま)へ。「かゝり」は構(かま)へ即(す)ちつくりかたの意(い)。

○禿(かぶ) 遊女(よめ)に事(こと)「つかし」へて其の見舞(みまひ)をする少女(しょうじよ)で、將來(しょうらい)遊女(よめ)となるもの。禿(かぶ)も結髮(むす)してゐるのであるが、もこ少女(しょうじよ)は多く頭髮(かみ)を禿(かぶ)にするから稱(なづ)かしたものであらう。

○御存(ごぞん)じ この語(ことば)はもこ御存知(ごぞんぢ)「ごぞんぢ」であらう。

○たべ 「たまへ」の約(やく)。

○いかい 「悪(わる)いかい」の音便(おんべん)。まじい。ひやご。

○ひんしやん 物を意(い)に留(とど)めないで氣輕(きかろ)に活潑(かっせ)に振舞(ふるま)ふさ。

○風流(ふうりゆう)浮瑠璃(うるる)に「腰元(こしもと)ちやくと心附(こころづ)き、そこらほわしがよき様に取替(と)り替(か)ひて申(ま)さん、ひんしやん」として走り込(は)み。

○立詰(たてまつ)め 締切(と)り切(き)り。「たて」は鎖(くわ)す意(い)。

○編笠(あみかさ) 遊客(やくかく)は大門(だいもん)の出入口(でしゆりぐち)前の茶屋(ちやゑ)で編笠(あみかさ)を借りて之(これ)を被(か)き、忍(しの)び姿(すがた)となつて遊廊(よらう)内(うち)に入(い)込むのである。

○率爾(そつじ) 粗忽(こつご)「そつじ」。

○おのれ 代名詞(だいめいご)から轉(ま)じた間投詞(かんたご)。(既出)

○逢(あ)はん物(もの)と 逢(あ)はずにすまうか、まはらならぬ。

○眞直が聞きたい 正直なところが聞きたい。實際を聞かしてもらひたい。

○ござりんした 原本、さし濁點なし。ござりました。「りんす」「りんした」は那詞。

○どうぞござんすぞ さうでございますか。「ぞ」は語意を強める助詞。

○遣手 禿や妓の装をなし、且つ監督し、又掃屋で諸事の取持ちをする女である。裾の利いた遊女であつた者が、これになつたが多い。

○なさりんせ 「なさいませ」の那詞。

○三の圖 三の圖即ち勅旨三枚目。圖は圓體の圖で扇をいふ。衣服の裾を二の扇の所まで發ゆるのである。

○揉みに揉うて 烈しく揉み合うての義。以て烈しく身體をゆすぶつて急いだ意。

○君を待つ夜は 北がよい 「松の落葉」巻七、おもやこそこの歌、君を待つ夜はのぼんば、ほんに〜さ、西も東も南もいやよ、ほんに〜さ、こかく待つ夜は来たがよい、のぼんば、ほんに〜さ。

○直と 問「ま」なく送「すき」なく。

○逢ふ瀬 逢ふ時（見索引）

○雁よ新町の花を見捨てて 講西熊野に「花を見捨てる雁がねの」。新町の花とは新町の遊女松風をさす。雁は花咲く頃前に北に飛去れば、かくいふ。

○蜷川 北の新地にも會橋崎新地にもいふ。蜷川は雁の縁語。

ばかり顔隠し東の方へ走行、一河内屋與兵衛に深い中と音に聞松風殿、昨日にも今日にも與兵衛は爰元へ參らすか、氣遣ひの無い用事有て尋る者、隠されては彼が爲にならず、サア眞直が聞たい〜、「まちつと先に見へまして、是から直に會根崎へ叶はぬ用とてござりんした」、「何じや會根崎へ、南無三寶遅かつた、拙者も跡から參らすはなるまい序に一尋ませう、五月の節供前か、後か、六月へ入ては漸う〜六日、其間に爰元で金銀の拂ひ、銀澤山に使ふた事はござらぬか、是も隠さずお知らせなされ」、「どうぞござんすぞ銀の事は存やせぬ、遣手にお問いなさりんせ」と、言ひ捨て局についと入、是は我ら不調法、よしそれとても與兵衛に逢へば知る、事、道も知つたる會根崎へたつた一飛び、一走」と尻、三のづ迄引つ襄げ揉みに揉、ふ、てぞ、「君を待夜はよやよやよ、西も東も南もいやよ兎角待夜は、北がよい」、先にも待ちながら、此方からひたと行通ふ、道の犬さへ見知る程現抜かせし河内屋與兵衛、小菊に逢ふ瀬を田の面の雁よ新町の、花を見捨て、蜷川爰の花屋に辿り寄る、後家のお龜出迎ひ「たま〜見へるお客にこそ、能ふお出が相應なれ與兵衛様は爰が家、ちと風變り御出を止めて、戻らし

○なれ なれども。

○濱の床几で 蛭川の濱邊に床几を出して。

○大工酒盛 「きり／＼と飲み」に、大工道具の

「鎌と鑿をいひかけたので、酒盛を大工酒盛と洒落た。そして後にこの縁で普請のことをいふ。

○きり／＼と てきほきと。まつま。

○幸左衛門 二代竹萬幸左衛門をいふ。大阪の名優で立役を勤めた。この文は、大阪吉左衛門町中座(座本竹萬幸左衛門)で享保六年七月七日から、油屋のお吉殺しを酒屋に仕替へて歌舞伎に上演したのをいふ。

○文藏 大阪の名優佐川文藏をいふ。享保六年七月七日から中座でお吉殺しの上演に實懸を勤めた。時に年二十七。

○べり立つる しやべりたてる。

○後家たしなめ お龜のいふ所は、いかに悪人の與兵衛でも聞きづらかつたであらう。「後家たしなめ」の言葉の中には、彼が心底無量の恐怖と不安を含蓄す。そして話題をかへようとした。その心うがも得て妙を極む。

○むさい、むさくるしい。またない。「倭訓栞」に「むさし汚穢の意にいへり」。

○兄 順慶町の河内屋太兵衛。

○潮 機會。「倭訓栞」に「物のほごよき時節をしほごいふも、潮の指引より出たるなるべし」。

○うめく 唸「うな」る。金の澤山押入れられた

やんしたか、小菊様呼ましや、内は上下座敷も詰る、濱の床几で大工酒盛きりき

りと飲みかけましょ、小菊様サア爰へ行燈に油注しや、油の序に油屋の女房殺

し、酒屋に仕替へて幸左衛門がするげな殺し手は文藏、憎いげな、與兵衛様まだ

見ずか、小菊様連れましてちとお出、やれお杯持て来い」とたつた一人でべり

立る、後家たしなめちと人にも物言はせい、生れて與兵衛こんなむさい床几の上

で、酒飲んだ事なけれど今日は許す、東隣り借り足して、與兵衛が座敷分に一ツ

拵や、材木・大工・諸色・諸入め見事に我ら仕る、きつい物か、エ下卑た此蒲

鋒の薄ひ切様は」と、僭上たら、暴れ酒暫く時をぞ移しける、與兵衛爰に居る

か、知らず事が有て来た」と、刷毛の彌五郎床几に腰掛け、我を侍が捜すぞよ、

「ヤしてそりやどんな侍が」と、胸にぎつくり横たわるも心に包む悪事の塊、

俄に顛動うろ／＼眼、ハテきよろ／＼すないやい、昨日から兄が所へ来て居る侍

じやとやい、ア、それで落著いた高槻の伯父森右衛門、逢ふては難儀爰へ尋て

來ふも知れぬ、早ふ外して逢ひともないと思へど急にも立たれねば、何がな潮に

と見廻し／＼ア、思ひ出した、新町に紙入忘れて来た、中にうめく程銀入て置

るをいふ。西鶴作「丑女」巻五、金銀も持あまつて迷惑の條に、

「銀十貫目人の箱は養生へて下よりうめく事すまじ」。

- つんと さつぱり。みんな。近松作「曾根崎心中」に「在所へ往かんしたとは言へ共、つんと誠にならず。
- 空贅吐いて 金もないに大金持らしいことを言つて、えらまうに嘘をついて。
- 花車 遊女屋の主婦をいふ。遊女を花に喩へて花を廻はす意といふ。(但これには異説もある)。
- 梅田橋 颯川に架し、曾根崎遊廓の西方で、田邊橋の北方にあつた。
- 跡偏 跡の字は足偏「あしへん」なればかくいふ。
- 櫻井屋源兵衛 與兵衛が馴染の色茶屋であらう。
- 三兩錢一貫文 金一兩を二十圓相場とすれば、三兩錢一貫文は六十五圓に當る。
- 廣袖 (既出)
- 花色 はなばな色。薄き藍色。
- 變成男子：誓ひたり 親覺上人の淨土和讃中の文。
- 願以此功德：安樂國 念佛者の回向文。
- 釋の妙意 釋は佛弟子の意、戒名の上に冠す。「妙意」はお吉の戒名。「釋の妙意三十五日お遊夜」の意は、回向文につけていふ妙意五七日お遊夜の別回向文である。
- 遊夜 忌日の前後。「釋林佛疑論」に「清明日菜畝之夜也」とあつて、人の死んだ翌夜をいふ。轉じて、佛事を行ふ前後をいふ。
- 志 手向けを志すこと。追善。「ひらかな盛衰

たついで一走りて来ふ、刷毛も来い」と立ち出る小菊引止め、「アざは〜と何じやの、有所の知れた紙入明日なと取らんせ」、「イヤそうでない〜、懐が重ふなければつんと遊ぶ心がせぬ」と、袖引放し二人連れ、根から忘れぬ紙入の空贅吐いて急ぎける、熱い茶四五服飲む程の、間もすかさず森右衛門行燈目當に花屋の門口、花車に逢はふ爰へ〜と叫出し、河内屋與兵衛が跡追て參つた、二階に居るか下座敷が罷通る」とつと入、是々申、新町に紙入忘れたとてたつた今お歸り、「何だ歸つた」、「まだ梅田橋越すか越さずか」、「是はしたり又跡偏、然らば明日にも與兵衛が參次第、酒でも飲ませ爰に留め置、早々本天満町河内屋徳兵衛方迄きつと知らせ、只今參りがけ櫻井屋源兵衛へも立寄吟味致せば、五月四日の夜大金三兩錢八百請取たと有、爰元へは何程拂つた、隠しては其方が爲にならぬ眞直に言へ〜」、「私方へも五月四日の夜に入て、大金三兩錢壹貫文」、「シテ其夜は何を着て參つた」、「廣袖の木綿袷色は雫花色かしつかりとは覺ませぬ」、「ムウよい〜、這入れ〜」と言ひ捨て、もと來し道を引返し又新、町へと

「變成男子の願を立女人成佛誓ひたり願以此功德平等施一切同發菩提心往生安

記「第三に「今日は志の日ぢやお茶飲め。」

○上人 眞宗の開祖親鸞上人。

○報謝 物を贈つて報い(むか)ふこと、僧が佛事を修した場合に、上に金品など布施物を贈ること。この文は、親鸞上人の御恩徳を深謝して度々寺にも参詣し、寄進もしてゐたことゝの意。

○劍難 刀傷の難にあふこと。刃で斬られる難。

○本願往生 佛菩薩の誓願を本願といひ、その誓願に満足されて安樂國に往生すること。

○催促 不幸は不信心から起ることなれば、信心を怠らぬやうにこの佛菩薩の催促。

○稱名 佛の御名をとまへること。南無阿彌陀佛の稱名念佛をいふ。

○悦び 法悦。この文は、お吉が佛菩薩に救はれて極樂往生することや、念佛三昧に入つてお吉の事を思ひ忘れることや、信仰より生じくるこれ等の悦びを重ねる意。

○行住坐臥 日常の起居動作。

○貰かします 還はします。

○ほえ居ります 泣きわめいてゐます。

○けしからず 異(ま)げしからず。を後に異(ま)げしからずといふに至つた語で、怪しい、異様な、奇怪であるの意。諸曲「隅田川」に「御出で候あまのけしからず物騒に候は何事にて候ぞ。」

○反古 書巻などを書いた紙の不用になつたもの。昔は紙質がよいから繰返して又用ひるによつて反古と書く。

樂國、釋の妙意、三十五日お速夜の志し、お同行衆集り勤めも既に終りける、

中にも同行中の老體帳紙屋五郎九郎、昨日今日の様に思ひしが、早三十五日の

速夜に罷成、二十七を一期として不慮の横死、平生の心立人に勝れ、上人の御恩

徳報謝の心も深かりし、此世こそ劍難の苦しみは有共未來は諸々の業苦を除き、

本願往生疑ひはよも有まじ、此御催促に心驚き、いよゝゝ一遍の稱名も悦んで

お勤めなされ、必ず歎かせらるな七左殿、殺し手も其内知れませう、たゞ御息女

の介抱が第一、先立人もそれをこそ満足」と、示せば有難涙ぐみゝさ様共々、

お吉が事は思ひ忘れ是も如來のお蔭と、信心堅固に悦びを重ね、行住坐臥に稱名

は缺かしませぬ去ながら、乙のお傳めは二ツ子乳が無ふてはと不便に存じ、死ん

だ明くる日銀附て餘所へ貰かします、姉は能ふ言ひ聞せられたれば合點して、香花の

斷れぬ様に佛壇についてばかり居ますが、なふ中娘めが朝から晩迄、母様々と

言ふてほへ居ります、是には困り果てました」と、ちやつと後の壁向いて聲を、

呑んだる嘸り泣き、「尤さこそ」と同行衆も、濡さぬ袖はなかりけり、折節居

間の桁梁、通る鼠の異しからず、蹴立て蹴懸くる煤埃、反古をちらりと蹴落し

○半切紙 杉原を横に二つに切つた書状用の紙、後には總て其の形に切つて用ひる紙の稱。

○一つ書 一つ何々箇條書がきにするこゝ。また要件のみを一箇條にして書くこゝをいふ。

○十匁一分五リン 新銀五十匁七分を金二十圓相場とすれば、新銀十匁一分五リンは約四圓に當る。

○書出し 代金を請求する勅定書。既出。

○大柄 わるびれた風(ふう)をししないで、おほぶな態度。

○そらさぬ顔 人の心に合ふやうにやさしい顔附をするこゝ。

○やす あります。

○氣の毒 他人の心配また困難などを思ひやつて同情するこゝ。前文に「遂(つい)ふては氣の毒(にく)られた」とある「氣の毒」とは別意。

○したが 然し。

○吉左右 吉報の義、轉じて消息の様子。

○奇棒 捕手などが用ひる五六尺の圓い棒。桿棒。

て鼠の暴(あは)れは静(しず)まりぬ、ソレ何(なに)やら落(おち)た七左殿、「誠(まこと)に是(これ)は」と取(と)り上(あ)げ見(み)れば半切紙(なみ)に一(い)つ書(かき)書(か)せ、十匁壹分五リン野崎(のざき)の割附(わりつけ)地、五月三日」とばかりにて誰(たれ)から誰(たれ)への名宛(なわ)もなく、色(いろ)こそ變(かは)れ所々(ところどころ)血(ち)に染(そ)まつたる書出(しゅしゅ)し一通(いつつう)、不思議(ふしぎ)の物(もの)と手(て)に取廻(とらま)し、「是(これ)は誰(たれ)やら見た手(て)じやはいの」、「我(われ)らもどふやら見た手(て)の風(かぜ)」、「ア、河内屋(かはちや)の與兵衛(よへいゑ)〜」、「それよ〜」と四五人の、口(くち)も與兵衛(よへいゑ)に極(きは)まれば思(おも)ひ出(で)して七左衛門(しちざゑもん)、「誠(まこと)に死(し)んだ亡者(むしや)が物語(ものがたり)り、四月十一日我(われ)ら夫婦(ふうふ)野崎(のざき)參(ま)り致(いた)せし日(ひ)、皆(みな)朱(あか)の善兵衛(ぜんべいゑ)・刷毛(はけ)の彌五郎(やごろう)・河内屋(かはちや)與兵衛(よへいゑ)三人(さんにん)連(つ)れて參(ま)りしと咄(はな)せしが、其(その)割附(わりつけ)に極(きは)つた、お吉(きち)を殺(ころ)し手(て)も大方(おほ)かたれで知(し)れました、三十五日(さんじゅうごにち)の速夜(たいや)に當(あ)り鼠(ねずみ)が是(これ)を落(お)すといふも、亡者(むしや)が知(し)らせに疑(うた)ひない、是(これ)も佛(ほとけ)の御恩德(ごおんとく)、ア、南無阿彌陀(なむあみだ)と平伏(ひらふ)して喜(よろこ)ぶ心(こゝろ)ぞ道理(だうり)なる、氣味悪(きみわる)ながら折々(せせ)の訪(と)ひ音(ね)づれも我(われ)爲(な)したと、人(ひと)に言(い)はれど悟(さと)られじと一倍(いちばい)大柄(おほ)そらさぬ顔(かほ)、河内屋(かはちや)の與兵衛(よへいゑ)でやす」とつ、と入(い)り、「つい三十五日(さんじゅうごにち)の速夜(たいや)に成(な)りましたの、殺(ころ)した奴(やつ)もまだ知(し)れず氣(き)の毒(どく)千萬(せんまん)、した(し)が追附(おっつけ)知(し)れましよ」と、我(われ)と口(くち)から向(むか)ふの吉左右(きちざう)・七左衛門(しちざゑもん)尻引(しりひ)つ褌(ふんどし)寄棒(よぼう)押取(おしと)り、「ヤイ與兵衛(よへいゑ)女房(にようばう)お吉(きち)を能(よ)く殺(ころ)したな、おのれは爰(こゝ)へ縛(しば)られに來(き)たか、遁(のが)れはない」と棒振(ぼうぶり)

○聊爾たうじ 倉忽くらとつ、そこつ。

○もめ 振舞ひ。鑿鑿。もてなし。「格調案」に「もめる」の反む世、もむに同じ、野語に人に物をふるまふ事を云ふも乘の意にや。

○むながひ 衣袴の胸先で交はる所。

○檢非違使の別當 檢非違使廳の長官、唐名に大理卿といふ。檢非違使は司法警察の事を掌る役で、平安朝時代の職名であるを、ここに轉用した。

○大理の廳 檢非違使廳のこと。

上る、「ア、七左衛門聊爾するな、シテ己が殺した其證據は」、「言ふな〜」、野崎參りの割附十女一分五リンといふ書附、所々に血も附て己れが手に紛ひない、此外に證據が入か同行衆捕へて下され」と、掴み附かん其勢、南無三寶露はれしと、衝き上る胸の動悸じつと押へて苦笑ひ、「此廣ひ世間幾人も似た手が有まい物でなし、野崎參りの入用は己がもめ、割附も何にも知らぬ、よい年をして馬鹿ひろくな、おのれら迄も同じ様に、立騒いで何とし居る」、「まつ斯うする」と掴み附を取て投げ、寄れば蹴倒し踏み轉し、一世一度の力の出し場、棒振ちたくり一振り振ればわつと逃ぐる、隙を窺ひ逃げんとすれば、「ソリヤ逃がすな」と押取巻く、小庭の内を追つ返しつ二三度四五度、隙を見合潛戸ぐはらりと逃げ出る、門の前に、兩三人「どつこい捕つた」と胸交掴んで捻ぢ据ゆるは、檢非違使の別當大理の廳の官人なり、跡に續いて伯父森右衛門聲をかけ、最前より各表に立給ひ、家内の一々残らず聞届けられしぞ、必未練に陳するな、エ是非もなやナ、世間の風説十人が九人汝を名さす、聞度に此伯父が心の中を推量せよ、事露はれぬ先遠國へも落すか、さなくは自害を勧め恥を隠しくれんと、新町・曾根崎行先〜

○際附 汚れなきの際きは立つて見えるをいふ。

○ちろり 酒を温めるに用ひる金盞製の器、筒形であつて注口がある。既出。

○酒鹽 食物を煮る時に味をよくする爲に加へる酒。この文は、酒を注いたら古血が朱色に變じたといふのであるが、實際は酒が、古血の暗黒色になれるを溶解して、朱の血汐にする作用はない。さればこれは菓林子が面白う書いたに過ぎぬ。

○茶屋傾城屋 苦にならず 近松作「冥途の飛脚中」の巻、梅川の詞にも「金に詰るはあらならび、此所の駝は駝ならず」とある。

○眼附き 目がさまり。

○ふつつ 「ふつ」都に促音、この添はつたもの。全然の意をなし、下に必ず「打消」の語に應じる。「神代紀」上に「求之和ふつに無所見」。

◇「お吉殿：南無阿彌陀佛」は、罪障を懺悔して、佛の御手に救はれる事を祈つて愛の案である。

○悲願 佛菩薩の救世の慈悲の誓願に攝取し給へるの意。

○細三寸 首輪の繩を頸體に懸け、兩手を背後へ廻して縛り上げ、首輪と手頸との間を三寸に締括せしむ。

○町中 (既出)

○千日 大阪市南區「市電千日前」下車にあつて、道頓堀の兩岸から南方新金刀比羅神社まで五、六百米の間を千日前といふ。現今は大阪歌謡伝展、映畫、レヴュー、浪花節等の娯樂場多く、繁華熱鬧を極め、大阪に於ける歡樂場の一である。この邊明治維新前

を尋ても、跡へ廻り跡へ廻り出合ぬは己れが運の極め、それ太兵衛其給是へ〜、
則 五月四日の夜著し出たる己れが給、所々の際附。強張り大理の廳より御不審、
只今證據の實否、己れが命生死二つの境なるぞ、誰か有酒々、「あつ」と言ふよ
り銚釐燭鍋手々に引さげさら〜さつとこぼしかけ、斯かる甥持弟持心を碎く涙
の色、酒鹽變じて朱の血汐、伯父甥顔を見合せて「あつ」とより外詞なく、呆れ、果
たるばかりなり、與兵衛覺悟の大音上、一生不孝放埒の我なれども、一紙半錢盜
みといふ事遂にせず、茶屋傾城屋の拂は一年半年遅なはるも苦にならず、新銀壹
貫匁の字形借り、一夜過れば親の難儀、不孝の科物體なしと思ふばかりに眼附、
人を殺せば人の敷、人の難儀といふ事にふつ〜と眼つかざりし、思へば二十年來
の不孝無法の惡業が、魔王となつて與兵衛が一心の眼を昏まし、お吉殿殺し銀を
取しは河内屋與兵衛、仇も敵も一悲願南無阿彌陀佛」と言はせも敢へず取て引
敷、細三寸に締め上れば、早町中が駢け附〜、直に引立引出す果は千日千人
聞、萬人聞ば十萬人殘る方なく世の鑑傳へて君が長き世に清からぬ、名や殘すらん
には刑場墓地のあつた所で、千日の寺の鐘も陰謀な響を傳へたも
のであつた。この文も、與兵衛が千日刑場の露と消える事を見

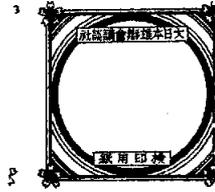
うたのである。
○世の鑑 惡事をしてはならぬといふ世の中の戒めの手本。

有共者行發者著は權作著書本

昭和十年五月十日印刷
昭和十年五月十八日發行

釋義と真叢書
傑作淨瑠璃身

製複許不



著者 樋口慶千代

東京市豊島區駒込五丁目九百七十五番地

發行者 野間清治

東京市本所區飯橋二丁目二十七番地ノ二

印刷者 井上源之丞

東京市本所區飯橋二丁目二十七番地ノ二

印刷所 凸版印刷株式會社本所分工場

發行所

東京市小石川區音羽町三丁目十九番地

大日本雄辯會講談社

(振替東京三九三〇番)
電話(34) 代表 五六二〇〇番
牛込(34) 六二〇〇番

(本製地海天)